

永山城跡Ⅲ

— 2・3次調査 —

2015年

日田市教育委員会



永山城跡及び周辺空中写真 南から



高石垣【石垣番号9】

序 文

日田市は九州のほぼ中央に位置し、古来より交通の要衝として発展してきました。江戸時代には幕府の直轄地・天領としてとして栄え、日田独特の文化を生み出してきました。

今回、報告します永山城跡は、江戸時代の初めに築城されたものです。現在は月隈公園と呼ばれ、市民や観光客の憩いの場として親しまれています。この永山城は江戸幕府が開かれる直前に築かれ、近世日田の礎をなし、天領として栄えた日田の原点とも言えるものです。わずか数十年で廃城となりますが、明治初期には日田県庁としてふたたび利用されました。

今回の調査では、本丸の礎石建物跡や本丸西側入り口大手門の構造・西側の堀の石垣構造など、新たな城の構造が明らかになってきました。

日田市ではこの永山城跡を市民の宝として、未永く保護していくことを目指し、史跡の指定を目指しているところです。

今後、発掘調査の内容をまとめた本書が、文化財の保護や活用、地域の歴史教材、または学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査中に指導をいただいた委員の先生方や、ご協力を賜りました丸山1・2丁目の地元の皆様方、全ての関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成27年3月

日田市教育委員会

教育長 三笥 眞治郎

例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成 23・24 年度に実施した永山城跡の発掘調査を中心とした報告書である。
2. 調査は、平成 23 年度（2 次調査）は別府大学文化財研究所と業務委託契約を結び行った。翌、平成 24 年度（3 次調査）は日田市教育委員会が主体となり、一部を別府大学文化財研究所に協力をいただき調査を実施した。
3. 調査に当たっては、地元の方々及び市土木建築部都市整備課にご協力を賜った。
4. 発掘調査は、平成 23 年度は行時が担当し、平成 24 年度は若杉が担当した。
5. 本報告において記述する永山城跡にかかる施設の詳細及び名称については、次々頁に凡例を示し、本文中及び図中の表記もこれに基づくものとする。
6. 平成 23 年度の永山城跡発掘調査は、地形測量・メッシュ杭設置・平面遺構実測・個別遺構実測・土層実測を発掘調査補助業務として別府大学に委託して実施した。
7. 調査中には調査指導委員である後藤宗俊氏（別府大学名誉教授）、豊田寛三氏（別府大学学長）、高瀬哲郎氏（石垣研究機構代表）と田中裕介氏（別府大学）、後藤晃一氏（県文化課）にご指導・ご助言を賜った。
8. 遺物実測・製図・写真撮影・遺構製図は、株式会社九州文化財総合研究所に委託し、その成果品を使用した。
9. 挿図中の方位・文中の方位角は、真北で示す。
10. 出土遺物、図面及び写真類は日田市埋蔵文化財センターに保管している。
11. 本書の執筆は第 1 章 -1、第 2 章を行時、第 1 章 - 2、第 3 章 -1、2（堀・曲輪）、第 5 章の一部を若杉が行い、第 3 章（天守跡・本丸跡、大手門・搦手口、堀、出土遺物）、第 4 章、及び第 5 章の 1 部は別府大学（上野淳也准教授）に執筆を依頼しその玉稿を賜った。その他の編集は上原が行った。



日田市の位置

本文目次

第1章 調査の経過	
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 発掘・整理作業の経過	3
第2章 遺跡の位置と環境	
(1) 地理的環境	4
(2) 歴史的環境	4
第3章 調査の記録	
調査の成果	
1. 伝天守跡（第3次調査1トレンチ）	7
2. 本丸跡（第2次調査1トレンチ・第3次調査2トレンチ）	10
3. 大手門	11
4. 搦手口（第2次調査2トレンチ）	14
5. 堀	16
6. 曲輪	18
7. 出土遺物	19
第4章 石垣について（3次元計測による解析）	
1. 3次元計測の意義について	25
2. 3次元計測の工程について	26
3. 小結	33
第5章 総括	34

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図（1/15,000）	6	第13図 曲輪調査位置図（1/200）	18
第2図 矢穴分類（1/4）	7	第14図 出土遺物実測図1（1/3）	20
第3図 平成23・24年度発掘調査位置図（1/900）	8	第15図 出土遺物実測図2（1/4）	21
第4図 天守跡遺構配置図【発掘3次1トレンチ】（1/100）	9	第16図 出土遺物実測図3（1/4）	22
第5図 本丸跡遺構配置図【発掘3次2トレンチ】（1/200）	10	第17図 出土遺物実測図4（1/4）	23
第6図 高石垣立面図【石垣番号8・9】（1/100）	11	第18図 合成されたスキャンデータ1	25
第7図 大手門北櫓西面実測図		第19図 合成されたスキャンデータ2	26
【発掘2次4トレンチ】（1/25）	12	第20図 高石垣3Dデータ	27
第8図 大手門北櫓南面・西面立面実測図		第21図 搦手口石垣立面実測図	
【石垣番号6・7】（1/100）	13	【石垣番号3】（1/100）	28
第9図 搦手口平面実測図【発掘2次2トレンチ】（1/25）	14	第22図 3Dデータ図面1	29
第10図 搦手口石垣立面実測図【石垣番号3】（1/100）	15	第23図 3Dデータ図面2	31
第11図 堀土層断面図（1/60）	16	第24図 石垣3測量位置ポイント図	33
第12図 堀石垣立面実測図【石垣番号16】（1/100）	17		

写真図版目次

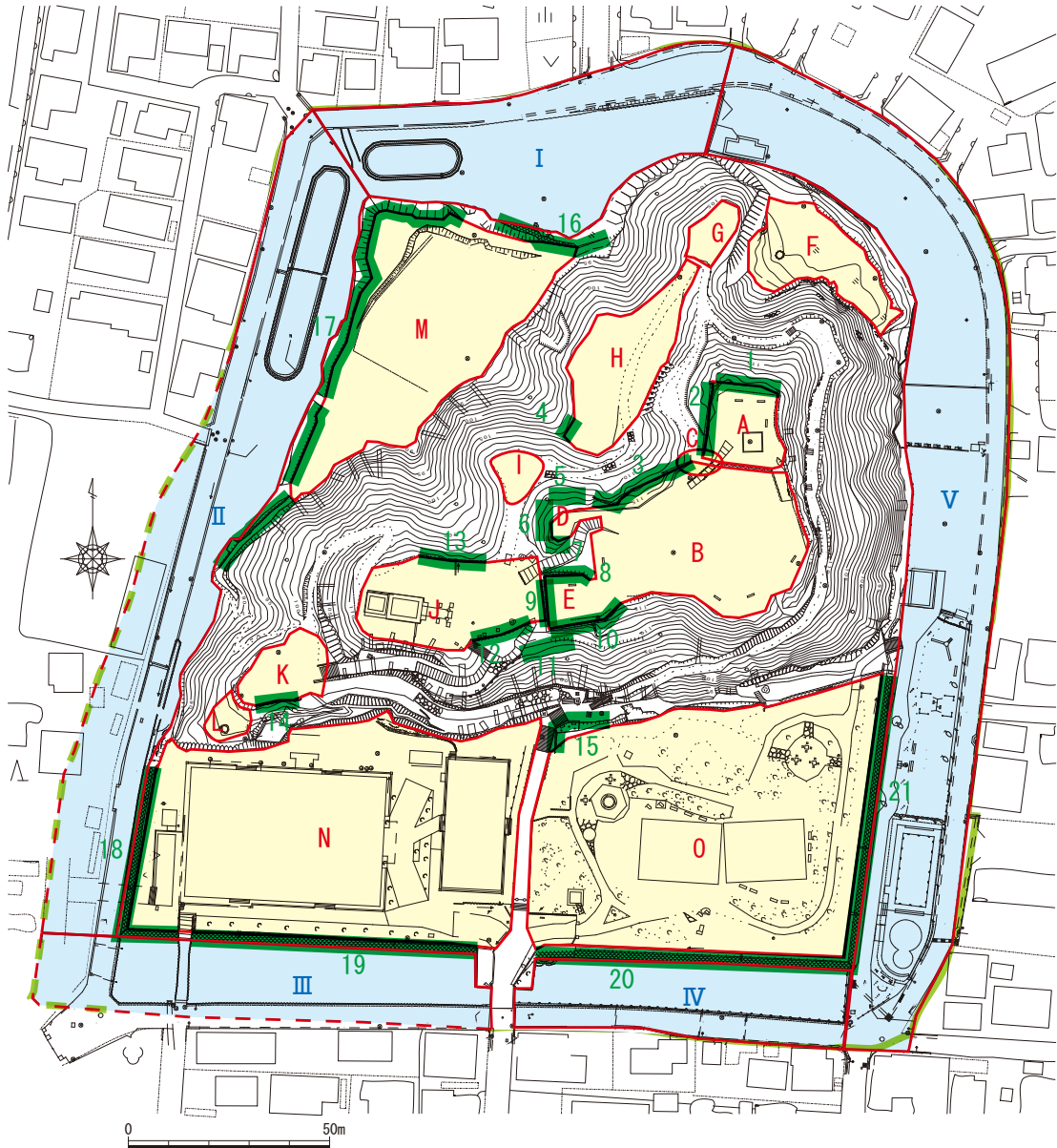
巻頭写真		6. 大手門（2次3トレンチ）発掘状況②（南から）	
永山城跡及び周辺空中写真 南から		7. 搦手門（発掘2次2トレンチ）発掘状況（北から）	
高石垣【石垣番号9】		写真図版3	
写真図版1		1. 搦手門 本丸北石垣東（番号3）東側検出状況（北から）	
1. 本丸跡（発掘2次1トレンチ）礎石検出状況（南から）		2. 搦手門（発掘2次2トレンチ）発掘状況（北から）	
2. 本丸跡（発掘2次1トレンチ）礎石検出状況（南から）		3. 天守跡西石垣（番号2）検出状況（北から）	
3. 天守跡石垣（番号1）検出状況		4. 本丸跡北石垣（番号3）検出状況（北から）	
4. 天守跡（発掘3次1トレンチ）発掘状況（南西から）		写真図版4	
5. 天守跡（発掘3次1トレンチ）建物跡発掘状況（南西から）		1. 本丸跡北石垣（番号3）検出状況①（北から）	
写真図版2		2. 本丸跡北石垣（番号3）検出状況②（北から）	
1. 大手門石垣（番号8・9）		3. 堀・曲輪⑧北石垣（発掘3次3トレンチ）発掘状況①（北から）	
2. 大手門石垣①（番号6）		4. 堀・曲輪⑧北石垣（発掘3次3トレンチ）発掘状況②（東から）	
3. 大手門石垣②（番号6）		5. 堀・曲輪⑧北石垣（発掘3次3トレンチ）	
4. 大手門（2次4トレンチ）発掘状況（南西から）		北壁積み石検出状況（東から）	
5. 大手門（2次3トレンチ）発掘状況①（南から）		6. 大手門（発掘2次3トレンチ）発掘状況（真上から）	

表 目 次

第1表 過去の調査年次と調査年度対応表	2	第3表 出土遺物観察表 2	37
第2表 出土遺物観察表 1	36	第4表 出土遺物観察表 3	37

本 文 写 真

写真1 平成23年度 発掘調査風景	2	写真6 平成24年度 現地説明会風景	3
写真2 平成24年度 発掘調査風景	2	写真7 発掘3次4トレンチ	18
写真3 平成23年度 調査指導委員会風景	3	写真8 発掘3次5トレンチ	18
写真4 平成24年度 調査指導委員会風景	3	写真9 発掘3次6トレンチ	18
写真5 平成23年度 現地説明会風景	3	写真10 発掘3次7トレンチ	18



施設名称凡例一覧表

施設番号	種別	名称	備考	規模 (m)	標高 (m)	面積 (㎡)	石垣番号	名称
A	曲輪	天守跡		19 16	120	347	1	天守跡北
B	曲輪	本丸跡		51 37	117	1777	2	天守跡西
C	門	彌手門		- -	-	-	3	本丸跡北
D	曲輪	大手門北橋台		- -	116	-	4	曲輪①南西
E	曲輪	大手門南橋台		13 13	117	-	5	大手門北橋北
F	曲輪	曲輪①	井戸有	43 22	92	584	6	大手門北橋西
G	曲輪	曲輪②		16 10	106	129	7	大手門北橋南
H	曲輪	曲輪③		49 20	105	734	8	大手門南橋北
I	曲輪	曲輪④		13 12	110	113	9	大手門南橋西
J	曲輪	曲輪⑤		45 22	111	861	10	大手門南橋南
K	曲輪	曲輪⑥		23 14	99	287	11	曲輪②南東
L	曲輪	曲輪⑦		12 10	97	89	12	曲輪③南
M	曲輪	曲輪⑧	堀曲輪	84 48	89	2252	13	曲輪③北
N	曲輪	曲輪⑨	堀曲輪	180 60	89	9744	14	曲輪③南
O	曲輪	曲輪跡	堀曲輪	- -	89	-	15	曲輪③北西
P	堀	肥後どろ堀		- -	87	-	16	曲輪③北
Q	堀	-		- -	87	-	17	曲輪③西
R	堀	-		- -	85	-	18	曲輪③西
S	堀	-	現況溝底は標高83.8m	- -	86	-	19	曲輪③南
T	堀	-		- -	87	-	20	曲輪③南
U	堀	-		- -	87	-	21	曲輪③南
V	堀	-		- -	87	-	22	曲輪③東

上記の図は、永山城跡Ⅱに使用した凡例図である、今回も位置の説明に一部使用している。

第1章 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

永山城跡は、日田盆地中央やや北寄りに存在する比高約30mの独立丘陵（通称：月隈山）にある遺跡である。大正期より「月隈公園」として親しまれ、現在では遊具施設などが整備されて市民の憩いの場となっている。

永山城跡は一般に「城跡」と漠然と認識されてはいたものの、公園として公的に管理されているため開発が及ぶことがなく、長らく調査の手が入ることはなかった。しかし平成10年代になると公園の管理道路整備計画が度々浮上することとなった。公園北西側に新規建設予定とされた管理道路建設計画を受けて実施した予備1・2次調査（平成20・21年度）では、城郭としての痕跡が想像以上に良好な状態で残されていることが確認され、「城の築造から発展までの歴史が良く保存されており、今後のまちづくりの核となりえる貴重な遺跡」との専門家の指導を得た。遺跡としての重要性が確認されたことを受け、事業主管課である都市整備課と遺跡の保存や調査について協議を重ねた結果、既存の参道を改良することにより遺跡への影響を最小限に抑える計画が都市整備課より提案されたことから、平成21年7月に予備3次調査を実施した。このときは横穴墓などの遺跡は確認されたものの、城郭遺構はほとんど発見されなかった。

これらの行政の動きと並行して、平成21年5月には市民団体から公園整備や永山城跡の保護に対する要望書や提言が提出され、行政と市民団体とで協議を重ね、平成21年10月4日には市民団体や地元住民を対象とした意見交換会（日田市教育委員会主催）を開催し、「元々ない北西側から新たに開発してまでルートをつくるべきではない」という考え方で大方の一致を見た。これを受け、行政内部で既存の参道（以下、南側参道）を改良する計画について再度調整を行い、公園整備と管理・保存の対策を検討していくこととなった。

平成22年にはこの南側参道の管理道路建設工事に伴う発掘調査（発掘1次調査）を実施するなか、8月12日に考古学や自然などの各専門家で構成される「月隈城跡・月隈横穴墓群発掘調査指導委員会」を開催した。この委員会では、「月隈山に管理道路をつくるべきではなく、城跡らしい現状の外観とイメージを残すべき」とする旨の意見を得、これに基づき、市では工事計画を一旦白紙に戻し、現在ある石畳の遊歩道の雰囲気を活かした改修を行う方針に変更するとともに、その工法や施行の細部にわたって考古学・城郭の専門家の指導を仰ぎながら事業を進めることとなり、1次調査も変更された工事内容に応じた内容・調査区へと変更し、調査を継続した。市教委では、こうした経緯や遺跡の重要性を踏まえ、平成22年度には永山城跡の調査に必要な基礎的資料を得るために「月隈城地形図作成業務」と「月隈横穴等平面実測業務」を実施し、平成23年度から本格的に永山城跡の発掘調査を計画し、城跡の保存と史跡の指定に向けて取組みを行うこととした。

保存に向けての1年目の調査（発掘2次調査）は、発掘調査のみならず、永山城跡を構成する石造物や史資料など調査範囲が多岐にわたることから、日田市と相互協定協力書を締結している学校法人別府大学の教育研究施設である、別府大学文化財研究所に調査の一部を委託することとし、平成23年8月10日より発掘調査を開始した。調査中である8月24日には、当日までの調査内容の報告と今後の調査方針の指導を得るために「第1回永山城跡発掘調査指導委員会」を開催し、その指導内容に基づいて調査を進め、8月28日には永山城跡発掘調査現地説明会を別府大学文化財研究所と協力して行った。永山城跡で行われる初めての本格的な調査に多くの見学者が訪れた。12月9日には遺構を埋土保存のうえ発掘調査を終了した。平成24年2月24日には平成23年度の各種調査内容の報告と翌年度の調査方針に関する指導を受けるため「第2回永山城跡発掘調査指導委員会」を開催し、平成24年度の調査範囲および指定等の検討材料としての概報の発行、本報告の発行年度に関する意見および指導をいただいた。

また、平成 23 年度には月隈公園の北側、永山城跡の堀が想定されている箇所において駐車場造成の計画があることを把握したため、平成 24 年 3 月 7 日～ 27 日に予備 4 次調査を実施した。

平成 24 年度は、前年度の発掘調査指導委員会での指導に基づいて発掘調査区を設定し、7 月 26 日～ 10 月 28 日の間、発掘 3 次調査を実施した。調査は別府大学の上野淳也助教をはじめとする各委員に適宜現地で指導を受けながら進め、調査期間中の 8 月 25 日には別府大学と協力して現地説明会を開催し、調査終了後は昨年度と同様に遺構を埋土保存した。

このような経過を経て、平成 25 年 2 月 14 日に開催した「永山城跡発掘調査指導委員会」では平成 23・24 年度の各種調査内容を報告し、また翌年度申請予定である史跡指定範囲について諮問し、概ね了解を得た。

なお、史跡指定に向けた申請については、当初は平成 25 年度に提出する予定であったが、市内部や関係各機関との協議・調整に時間を要して時期がずれこんだため、時宜を踏まえて、申請をおこなう予定である。

平成 23・24 年度の発掘作業および整理事業の詳細は下記のとおりである。なお、各年度の調査組織および平成 22・23・24 年度開催の指導委員会の内容については『永山城跡Ⅱ 発掘調査概要報告書』日田市教育委員会 2013』に掲載しているため、ここでは省略する。また、概報においては、予備調査や史資料調査など、全体的な価値を述べているため、本報告では、発掘調査のみの報告に留めている。

第 1 表 過去の調査年次と調査年度対応表

調査の名称	調査年度	調査目的	調査期間	報告文献	調査面積㎡
予備 1 次調査	平成 20 年度	管理道路工事（北ルート）に伴う試掘調査	平成 21 年 3 月 2 日～ 3 月 11 日	『平成 20 年度 日田市埋蔵文化財年報』 2009	69
予備 2 次調査	平成 21 年度	管理道路工事（北ルート）に伴う試掘調査	平成 21 年 5 月 14 日～ 7 月 16 日	『平成 21 年度 日田市埋蔵文化財年報』 2010	99
予備 3 次調査	平成 21 年度	管理道路工事（南ルート）に伴う試掘調査	平成 21 年 7 月 22 日～ 8 月 7 日	同上	97
発掘 1 次調査	平成 22 年度	管理道路工事（南ルート）に伴う発掘調査	平成 22 年 5 月 17 日～ 平成 23 年 3 月 15 日	『永山城跡』日田市埋蔵文化財調査報告書 第 99 集 2011	243
測量調査	平成 22 年度	重要遺跡確認調査	-	-	-
発掘 2 次調査	平成 23 年度	重要遺跡確認調査	平成 23 年 8 月 10 日～ 12 月 9 日	『永山城跡Ⅱ 発掘調査概要報告書』 2013	528
予備 4 次調査	平成 23 年度	公園駐車場造成に伴う予備調査	平成 24 年 3 月 7 日～ 3 月 27 日	『平成 23 年度 日田市埋蔵文化財年報』 2012	18
発掘 3 次調査	平成 24 年度	重要遺跡確認調査	平成 24 年 7 月 26 日～ 10 月 28 日	『永山城跡Ⅱ 発掘調査概要報告書』 2013	199

※網掛け部が今回の報告にかかる調査。



写真 1 平成 23 年度 発掘調査風景



写真 2 平成 24 年度 発掘調査風景

(2) 発掘・整理作業の経過

平成23年度

- 8月10日 調査開始
- 8月24日 第1回 永山城跡発掘調査指導委員会
- 8月27日 地元住民向け現地説明会
- 8月28日 一般向け現地説明会
- 12月9日 調査終了
- 2月24日 第2回 永山城跡発掘調査指導委員会



写真3 平成23年度 調査指導委員会風景

平成24年度

- 7月26日 石垣清掃（～27日）
- 7月30日 草刈（～8月3日）
- 8月1日 北側堀跡 重機掘下げ（～2日）
- 8月6日 土嚢撤去
- 8月8日 遺構掘り下げ（～10日）
- 8月8日 田中裕介氏指導（～9日）
- 8月20日 遺構掘下げ、実測（～28日）
- 8月24日 高瀬哲郎氏指導
- 8月25日 現地説明会
- 8月27日 後藤宗俊氏・豊田寛三氏・後藤晃一氏指導
- 8月29日 遺構掘り下げ・実測・埋め戻し（～31日）
- 9月5日 伐採樹木片付け（～6日）
- 9月7日 北側堀掘り下げ（～9日）
- 9月9日 高瀬哲郎氏指導
- 9月12日 石垣測量（～14日）
- 9月19日 北側堀埋め戻し、器材整理
- 9月24・27日 南東側櫓確認
- 9月27日 後藤宗俊氏指導
- 9月28日 豊田寛三氏指導
- 10月9日 南東側櫓確認（～12日）
- 10月10日 鳥居付近建物確認（11日）
- 10月11日 高瀬哲郎氏指導
- 10月19日 写真撮影・埋め戻し
- 10月29日 埋め戻し・調査終了
- 2月14日 委員会開催



写真4 平成24年度 調査指導委員会風景



写真5 平成23年度 現地説明会風景



写真6 平成24年度 現地説明会風景

また、出土遺物の整理作業及び図面整理については、平成26年5月1日～30日の間、実施した。

第2章 遺跡の位置と環境

(1) 地理的環境

永山城跡は、日田市丸山2丁目に所在する。日田市は大分県の西部を占め、北部九州のほぼ中央に位置する。三隈川（筑後川）や花月川など多くの河川により形成された沖積地上に市街地の広がる日田盆地を中心として、標高150m前後、沖積地から比高約30～40mを測る段丘が取り囲む。この段丘は約9万年前、新生代第4期更新世後期に発生した阿蘇4火砕流により古い日田盆地が埋め尽くされた後に河川浸食などにより形成された地形であるため、ほぼ全周にわたって高さが均一となっており、通称「原（はる）」と呼ばれ、「山田原」「吹上原」「辻原」など多くの段丘が存在する。この段丘の周囲は標高200～400mの耶馬溪火砕流の台地で囲まれ、さらにその外側は標高400～1,200m級の筑紫溶岩系安山岩からなる古期溶岩台地に囲まれ、市域の境となっている。このように四方を険しい山に囲まれた場所でありながら、古くは市内の地名が大宰府と豊後国府を結ぶ官道上の駅家として『豊後国風土記』『延喜式』に記載されている。また天領として日田が栄えた江戸時代には、西国筋郡代（代官所）を中心として筑後国高良山路・久留米城路・筑前国太宰府路・福岡城路・彦山路・小倉城路・豊前国宇佐宮路・中津城路・玖珠郡森宮路・直入郡岡城路・肥後国阿蘇山路・隈府路・熊本城路と呼ばれる旧国の主要な地域と日田を結ぶ道筋が幕府により整備され、内陸部の山間地にあつて交通の要衝としての役割を果たしていた。

永山城跡の所在する通称「月隈山・月隈丘陵」は、花月川北岸沖積地にある独立丘陵で、これは阿蘇4火砕流による阿蘇溶結凝灰岩が河川作用により周囲の段丘から切り離された、標高118m、比高約30mを測る残丘である。このような残丘はほかにも幾つか見られ、なかでも盆地中央部の三隈川河畔にある日隈山（筑紫溶岩）、盆地西部の三隈川と花月川の合流点付近にある星隈山（阿蘇溶結凝灰岩）は月隈山と合わせて「日田三丘」と呼ばれ、古くから目立つ存在であったため、それぞれに墓や城などとして利用された痕跡が残っている。

(2) 歴史的環境

永山城跡を取り巻く主な遺跡と、近世については周辺の文化財も含めて概観する。

日田盆地では旧石器～縄文時代の遺物が出土する遺跡は点在するものの、遺構が良好に残る遺跡はほとんど見られない。しかし次の弥生時代になると、盆地内での遺跡数が激増する。永山城跡の西の台地上には吹上遺跡があり、前期後葉以降の袋状貯蔵穴や竪穴住居跡のほか大陸系磨製石器（石斧・石庖丁等）の出土から、水稻耕作の定着が示唆される。この吹上遺跡では中期になると銅戈や鉄剣・南海産貝製腕輪などを副葬する大型成人用甕棺墓が複数営まれ、日田における特定集団墓の出現を見ることができる。この時代の拠点的な遺跡は「原（はる）」と呼ばれる台地上に営まれることが多い（後迫遺跡、佐寺原遺跡など）ものの、沖積地微高地や台地斜面にも良好な状態で残されている（徳瀬遺跡、柳ノ本遺跡など）。

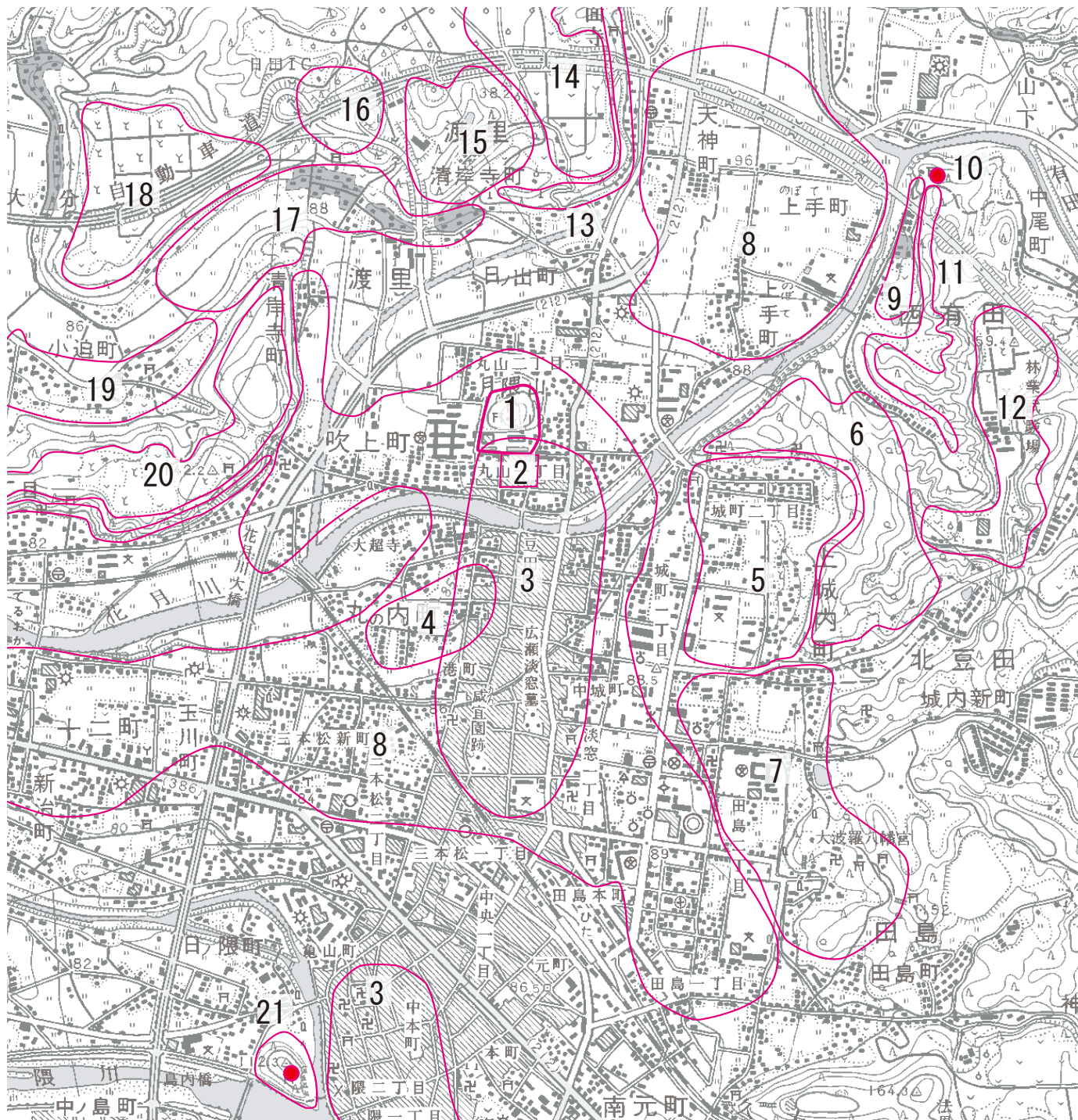
弥生時代の後期終末には吹上遺跡の北東の台地上、小迫辻原遺跡で環溝集落が出現し、古墳時代初頭には方形の環溝を備えた豪族居館へと発展する。その一方で拠点集落は台地上から沖積微高地や斜面へ下りてくる傾向が見られる（本村遺跡、一丁田遺跡など）。古墳時代中期にはカマドや鍛冶技術など、新たな生活様式の流入と定着が看取でき、一丁田遺跡や萩鶴遺跡では鉄鋌が出土している。またこの時期に盆地内各所で古墳が造られるようになり、並行して台地崖面や独立丘陵などに一般用の横穴墓の造営が開始される。日田では後期になって朝日天神山古墳群などの前方後円墳が造られはじめ、さらにガランドヤ1・2号墳や法恩寺山3号墳など装飾古墳も見られるようになる。「日田三丘」の月隈山・星隈山に造られた横穴墓群もこの時期のものと考えられており、また日隈山で

は江戸期に山頂の神社付近で平縁細線式獣帯鏡（県有文）が出土したと伝えられ、古墳が存在した可能性が考えられている。

古代の日田は、古墳時代からの在地の有力豪族である日下部氏が郡司として治めたと考えられ、小迫辻原遺跡では8世紀後半～9世紀前半の掘立柱建物などの遺構とともに須恵器転用碗や「大領」銘土器の出土から、公的施設の存在および日田郡司・日下部氏との関連も指摘されている。そのほか、慈眼山遺跡では8世紀前半代の井戸内から「門」「林」銘土器が出土、また近隣の大波羅遺跡でも「山」「田」銘土器のほか方形掘り方の大型柱穴列などが確認されており、このあたりに中心施設の存在が考えられるようになった。なお花月川右岸の日田条里上手地区においては10～11世紀代の集落が見つかっており、古代末期に日下部氏に代わって台頭してきた大蔵氏に関連するものと指摘されている。

古代末から日田を治めた大蔵氏は後に鎌倉幕府の御家人となり、日田氏を称するようになる。15世紀中頃の日田氏滅亡まで、慈眼山につくられた大蔵古城を居城とし、西豊後一帯を支配していた。当初は前代に引き続き日田条里上手地区を中心的集落としていたようであるが、14世紀以降は大蔵古城南側沖積地の慈眼山遺跡に中心が移ったようで、大規模な整地層の上に営まれた掘立柱建物跡などとともに青銅製の柄頭や青磁・中国銭・瓦などがみつかっており、武士階級を中心とした有力層の集落であったことを示している。日田氏滅亡後は大友姓日田氏の支配下となり、引き続き慈眼山のふもとで集落が営まれている。また小迫辻原遺跡では12～16世紀の100棟以上の掘立柱建物跡や4基の方形環濠屋敷が確認されており、武家屋敷と推定されている。なお、大友姓日田氏の滅亡後の様相については、遺跡という視点からは不明な点が多い。この時期の日田盆地は大友氏が任命した八郡老による支配が行われるが、豊臣秀吉による大友氏取り潰しを受け、その支配は終焉する。

大友氏の文禄2（1593）年取り潰し後、日田は太閤蔵入地となり、日田の近世が幕を開ける。翌文禄3（1594）年には宮木長二郎が入部し、永山城に先立って日隈山に日隈城を築く。近世の遺跡については、永山城とその南に広がる豆田町を中心に、近年の調査例が増加している。永山城の南にあったとされる代官陣屋の跡「永山布政所跡」は島原の乱を受けて幕府が地方支配強化のために寛永16（1639）年に設置したもので、中央から代官が派遣され、これを契機に永山城は政治的機能を失い廃城となった。18世紀後半には支配石高の増加に伴って代官は西国筋那代へと昇格し、近世を通して日田および九州内幕府直轄地の政治的中心地となった。布政所跡はこれまでに数回の確認調査が行われ、江戸期の建物など陣屋構造を解明できる遺構や「御役所」と記された木簡などがみついている。永山城・永山布政所から花月川を挟んで南側には国の重要伝統的建造物群に選定された豆田町が広がり、豆田一帯から永山布政所周辺まで含めて城下町遺跡となっている。豆田町は永山城の城下町として形成され、九州諸藩に「大名貸し」として融資する掛屋商人を中心として金融業や産物仲介業が発展した。後に「日田金」と称されて九州の経済活動の中心を占めるようになり、その商家建物である草野家住宅（国重文）や廣瀬淡窓旧宅（国史跡）が現在も軒を連ねている。廣瀬淡窓旧宅は商家であるとともに、19世紀前半に開かれた私塾・咸宜園（国史跡）を創設した儒学者・廣瀬淡窓の生家で、咸宜園歴代塾主やその家族の墓地である長生園と合せて史跡に指定されている。淡窓が開いた咸宜園では現在、淡窓の伯父が建てその後淡窓が居宅とした秋風庵や書斎・遠思楼などを見ることができ、往時は他に講堂・東塾など多くの建物があったようで、江戸時代末期の様子が絵図に描かれており、発掘調査でいくつかの建物の痕跡が明らかになっている。なお淡窓は咸宜園開塾前には長福寺学寮・桂林園といった塾を開いており、長福寺学寮跡についてはその建物の痕跡が長福寺境内の発掘調査によって確認されている。この長福寺の本堂は九州最古（江戸時代初期）の真宗寺院本堂様式をよく伝えるものとして国重文に指定されている。また、淡窓旧宅の西隣における発掘調査では江戸時代後期～近代の建物跡とともに「三丁目 中村」と墨書された有田焼の皿がみつき、江戸末期の豆田町の絵図との照合により、当時町年寄を務めていた中村家の建物であることが明らかとなっている。町屋の絵図と発掘成果が一致した例として注目される。



- | | | | | |
|--------------|----------|-----------|------------|-------------|
| 1 永山城跡・月隈横穴群 | 6 大蔵古城跡 | 11 夕田横穴墓群 | 16 草場第2遺跡 | 21 日隈古墳・日隈城 |
| 2 永山布政所跡 | 7 大波羅遺跡 | 12 佐寺原遺跡 | 17 本村遺跡 | |
| 3 城下町遺跡 | 8 日田条里遺跡 | 13 羽野横穴墓群 | 18 小迫辻原遺跡 | |
| 4 一丁田遺跡 | 9 夕田遺跡 | 14 後迫遺跡 | 19 鍛冶屋廻り遺跡 | |
| 5 慈眼山遺跡 | 10 夕田古墳 | 15 草場遺跡 | 20 吹上遺跡 | |

第1図 周辺遺跡分布図 (1/15,000)

第3章 調査の記録

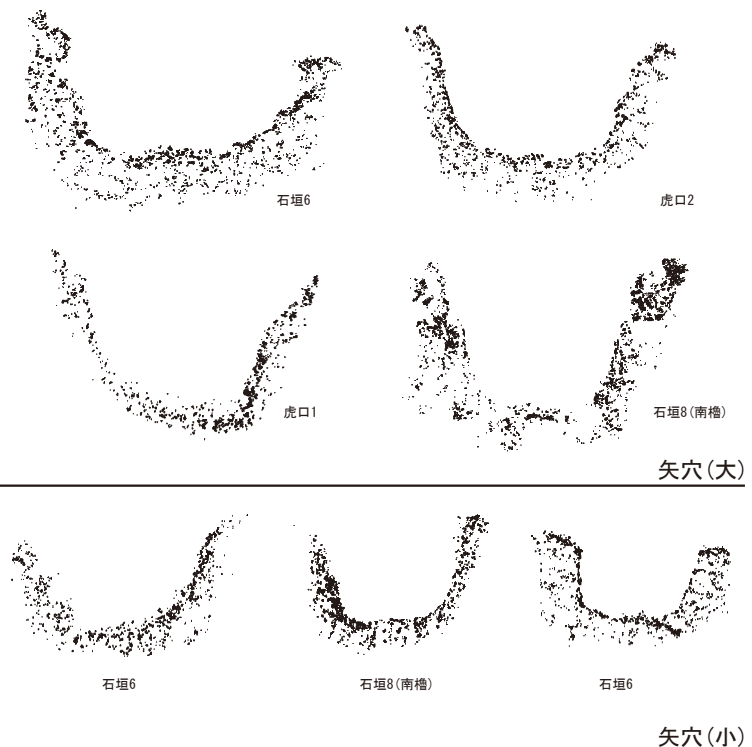
調査の成果

永山城跡の調査についての詳細は、『永山城跡Ⅱ』に詳しく述べていることから、ここでは、市内遺跡等調査事業の重要遺跡確認調査として実施した、2次・3次調査について簡単に述べる。2次調査は、主に本丸跡を中心に調査を行い、礎石建物跡や門跡が確認された。また、石垣の測量や矢穴の調査等を実施している。矢穴に関しては、大きく「大（5～7cm）」・「小（5cm未満）」の2つのサイズに分けられ、石材の大きさによりクサビ（矢）が使い分けられていたことが伺われる。同様の使い分けは、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に築かれた「倭城」にも見られるが寛永期以降の改築段階を示すものである可能性も有し、今後の調査課題である。3次調査では、天守跡や堀跡・曲輪の調査を行った。天守跡では新たな石垣が確認され、堀跡では、新たな石積みの発見や堀の形状・深さが判明した。

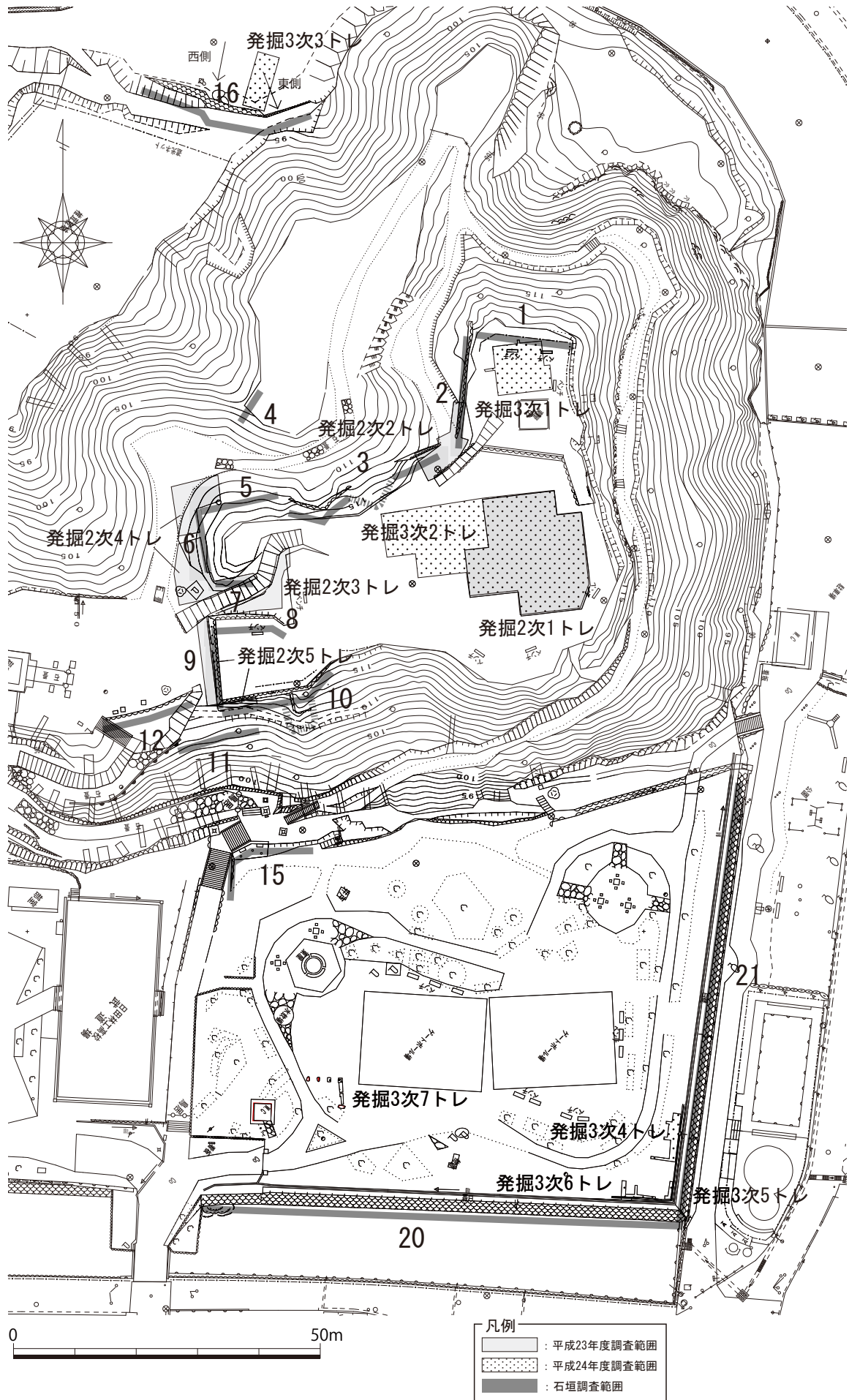
1. 伝天守跡（第3次調査1トレンチ）（第4図 写真図版1）

当調査区は、天守台であるとの言い伝えがある場所に設定した。調査面積は約80㎡である。表土の厚みは5～20cm余りで、遺構面までの深さは非常に浅いものであった。また、調査区南側の擁壁施工時にかなりの改変を受けたようである。調査の結果、柱穴らしき小土坑群及び樹木痕が検出された。小土坑の内、中央に礎石・礎盤或いは根固めの石らしき平石が据えられたものが、数基確認されている。この内、遺構4基を用いて1間×1間の建物跡が復元されたが、平石の上面にはコンクリートの付着が見られ、後世に立てられた「神社」や「祠」或いは「東屋（休憩所）」等に用いられたものである可能性が高いと判断した（第4図／写真図版1-5参照）。結果的に、検出された遺構群からは、近世の掘立柱建物と確証できる建物跡を復元することはできなかった。出土遺物に関しても、瓦の出土は皆無で土師器や唐津焼の小破片数点に限られた。

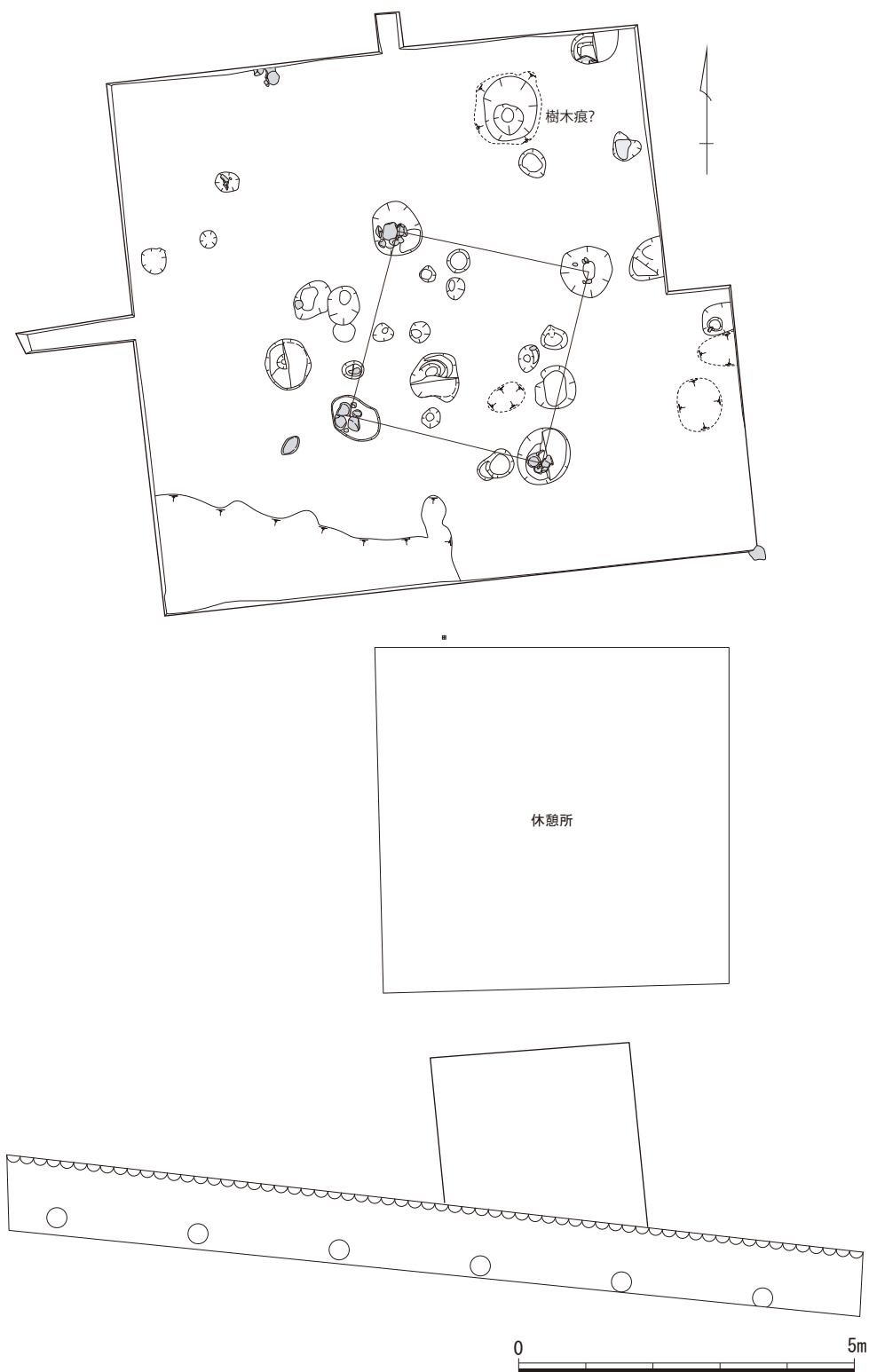
以上のように、伝天守跡の調査においては、遺構・遺物共に天守台の存在を推定させるような痕跡は、確認されなかった。しかし、天守北側では、これまで未確認であった玉石垣（石垣番号1）が新たに確認され（第4図／写真図版1-3参照）、本丸よりも一段高い石垣構造物の存在には疑念の余地が無くなった。城郭構造を考えると、搦手口との位置関係から、天守台ではないとしても、搦手口との位置関係から櫓のような施設が構築されるべき場所であり、「本丸北櫓跡」と改称すべきかもしれないが、現状でそれを肯定する要素は、当調査区を取り巻く石垣の存在のみである。今後の検討を必要とする。



第2図 矢穴分類 (1/4)



第3図 平成23・24年度発掘調査位置図 (1/900)



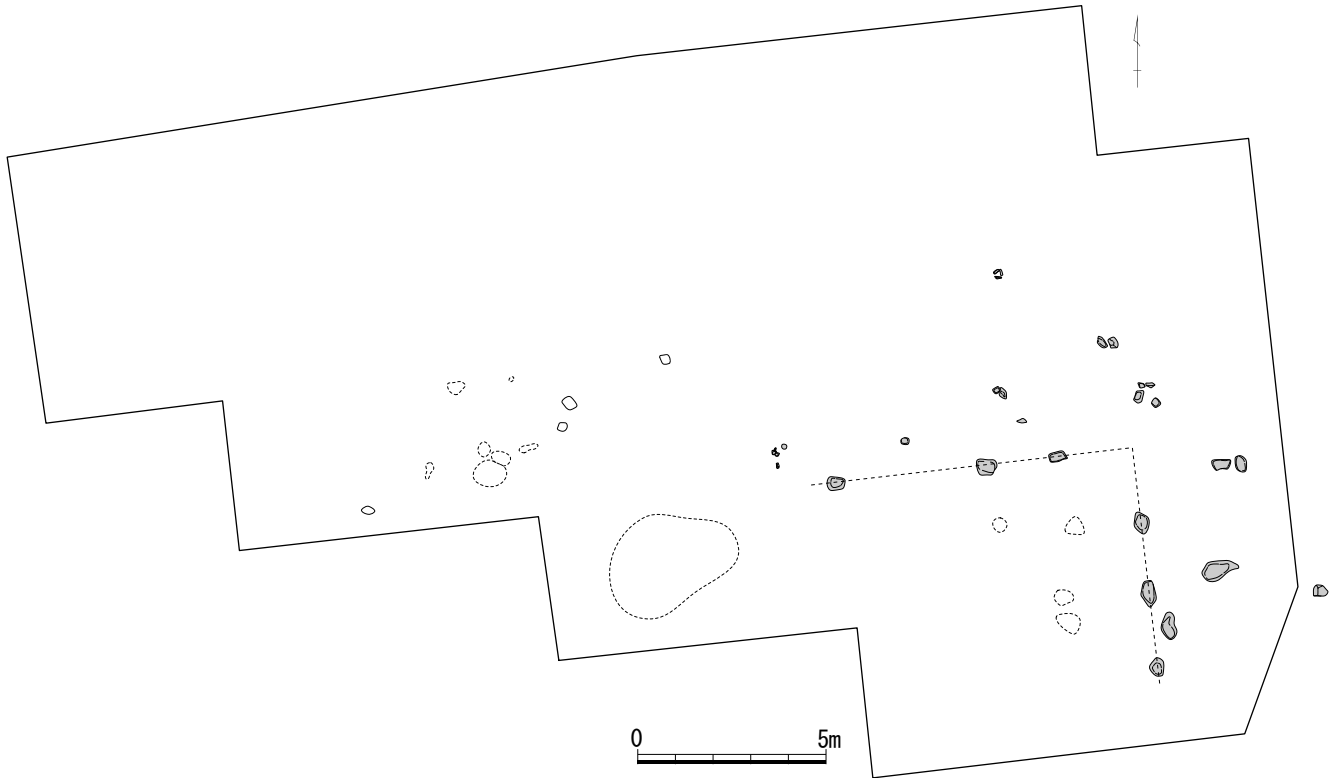
第4図 天守跡遺構配置図【発掘3次1トレンチ】(1/100)

2. 本丸跡 (第2次調査1トレンチ・第3次調査2トレンチ) (第5図 写真図版1)

第2次調査における調査面積は316㎡である。表土の厚みは5～20cm余りで、遺構面までの深さは非常に浅いものであった。調査においては、本丸跡東側にて、南北に2m弱の間隔で並ぶ3基の礎石を確認した。3基の礎石の間隔は、慶長期の武家屋敷に用いられる間尺である6尺5寸(≒195cm=1間)を一間として用いた建造物が存在したことを示唆するもので、東西に4m弱及び2m弱の間隔で3基並ぶ礎石のプランに直交する形でL字状の同一方形プランに乗るものであると判断される(第5図参照)。更なる礎石の広がりを確認すべく、3次調査において、2次調査に設定した1トレンチから西側に4グリッド64㎡を拡張したが、新たな礎石は確認されなかった。永山城の縄張り上、この同一プラン上に乗る6基の礎石は、位置的にも本丸の中心的な礎石建物の一部である可能性が高い。今後、大手門へ向けて更なる礎石の検出をおこなってゆく必要がある。

出土遺物は、少量であったが、胎土目積み段階(1590～1610年代)及び砂目積み段階(1610～1630年代)の唐津焼・丹波焼等の播鉢等の国産陶器(第5図22～23)及び高台内にカナナ削り痕が明瞭に確認される青花・朝鮮系陶磁器等の貿易陶磁器(第14図3・8)に代表される17世紀前半を主体とする遺物群と、20世紀以降の遺物群の大きく2群に大別できる遺物組成が認識された。17世紀前半代の遺物群に関しては、茶陶然とした遺物が多いことが指摘される。また、瓦の出土は確認しておらず、本丸にも瓦を使用した建造物は存在していた可能性が高い。

天守跡・本丸跡に関しては、瓦は1点も出土しておらず瓦葺の高層建築物は想定できない。しかし、いずれも玉石垣を用いた石垣構造物上に構築されており、永山城の中核であることは間違いなく、玉石垣と鎬(シノギ)積み(石垣番号3)は永山城の特徴であり、シノギを多用した石垣の平面プランは倭城を彷彿とさせる。



第5図 本丸跡遺構配置図【発掘3次2トレンチ】(1/200)

3. 大手門 (第6～8図 写真図版2)

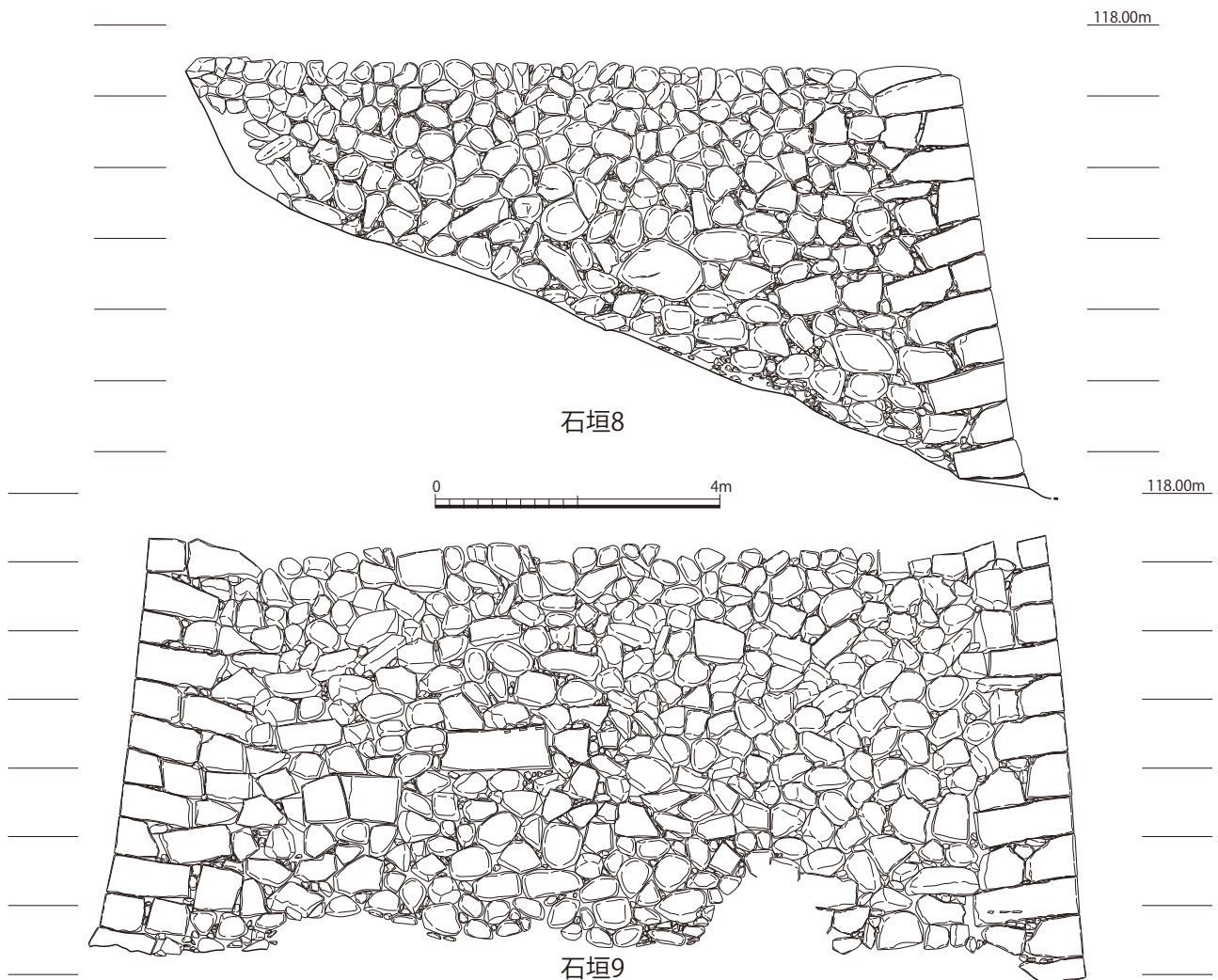
永山城本丸は西側に開口し、大手門が築かれていたものと推定される。大手門の構造に関しては、今後、更なる検討を加えなければならないが、現状では、南北に櫓を築き「虎口」を挟みこむ「渡櫓形式」や、南にのみ櫓が着く「隅櫓付形式」のような「櫓門」構造が想定される。

(1) 大手門南櫓台 (第2次調査3及び5トレンチ)

大手門南櫓台跡は、文政年間(1818～1829年)の絵図に描かれている櫓跡であると推定されるものである(第6図参照)。しかし、石垣の観察から、全てが当初から普請されたものではなく、中位以上に関しては、明らかに後世に積みなおされたものであることが理解される。

以上のような観点から、櫓周囲に改変の痕跡が見受けられないか櫓跡の北(3トレンチ)、西・南(5トレンチ)にトレンチを設定して掘り下げをおこなった。北西隅の算木に関しては、石垣基底部の石には自然面が観察されるが、それ以上の算木には鑿突仕上げが施されていた。また、南西隅の算木も同様に鑿突仕上げが施されている。この北西隅～南西隅間の基底部分の長さは、約14m(≒7間)を測る。

虎口の一部を形成する北面(石垣8)に関しても、石垣中位以上は「ネズミシノギ」積みを含む、極めて新しい積み直しが見られるが、その基底部には凝灰岩を掘削した極めて念入りの「根切」地業が施されている。この根切地業は、北櫓においても確認されており、この虎口プランが城郭創建当初からのプランを踏襲していることが確認された。



第6図 高石垣立面図【石垣番号8・9】(1/100)

(2) 大手門北櫓 (第2次調査4トレンチ)

出土遺物としては、石垣北面の前面埋立地業中から、17世紀中頃の肥前産時期が出土している(第14図6参照)。

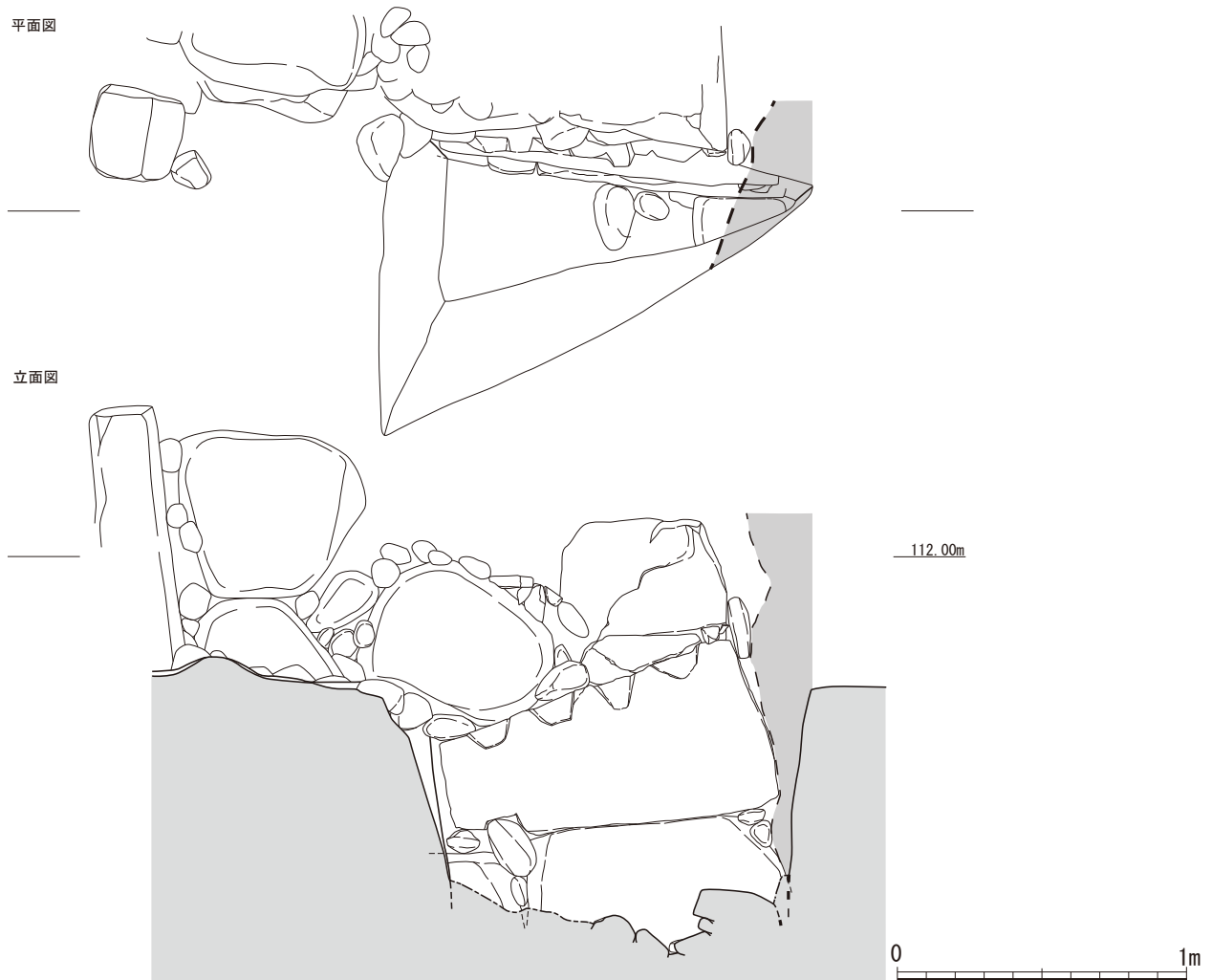
a. 西面

平成23年度の調査は、平成21年度の日田市教育委員会の調査において発見された北西隅の算木を再検出し、北櫓西面の石垣を面で確認することを目的の一つとした。再検出された北西隅の算木には鑿突仕上げが確認され、後世に手が加えられていたことが把握された。

調査の過程において、虎口側である南西隅の算木を新たに検出することができた(第7図/写真図版2参照)。北西隅-南西隅算木の基底部を測ると、距離は14m弱(≒7間)を測る。また、南西隅の基底部には、凝灰岩を掘削した「根切」地業が施されており、北櫓とそれに伴う虎口プランが城郭創建当初からのプランを踏襲していることが確認された。南西隅の算木の表面は、割られた状態のままの自然面で、自然面に確認される矢穴の幅は極めて大きく幅13cmを計る(第7図参照)。石垣前面からは、コビキA調整瓦及びコビキB調整丸瓦が粉々に割れた状態で検出されており(写真図版6参照)、これと合わせ見ても慶長期の石積みである可能性が高い。北櫓西面に関しては、北西・南西両隅上位の算木が抜かれ、前面には栗石が大量に流れ出している。石垣は、中央部のみが山状に玉石垣4~5段を遺している状況であった。(写真図版2-4参照)

b. 南面

南面に関しては、存在が知られていなかった貼石状の石積みを確認した。石積みには、側溝が伴う。南北櫓間の門が存在したと想定されている部分においては、南面における石垣基底部の検出レベルから、本来階段と平坦面が並存していたものと考えられる(第8図参照)。



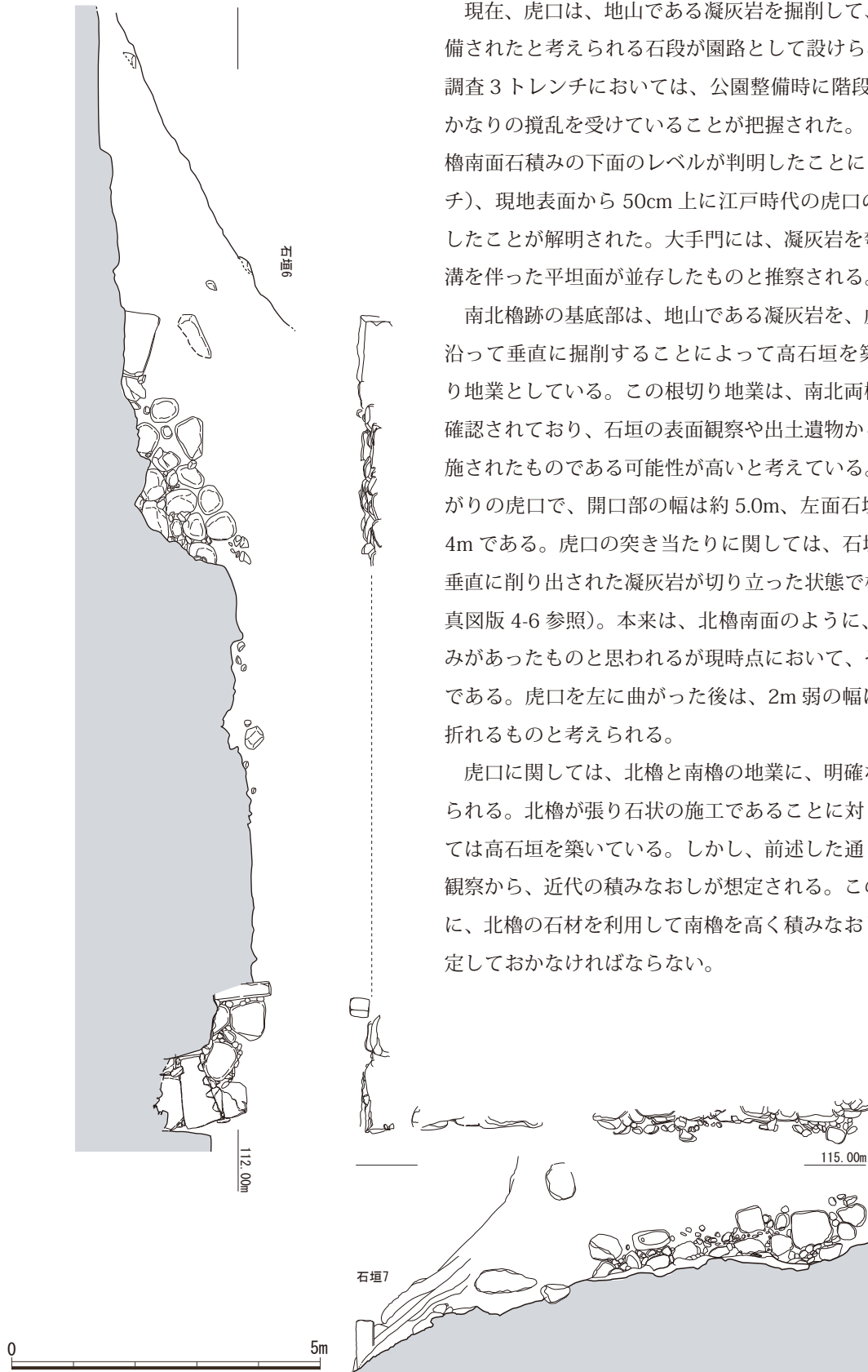
第7図 大手門北櫓西面実測図【発掘2次4トレンチ】(1/25)

(3) 虎口について（第2次調査3トレンチ・4トレンチ）

現在、虎口は、地山である凝灰岩を掘削して、大正時代に整備されたと考えられる石段が園路として設けられている。2次調査3トレンチにおいては、公園整備時に階段を設けた際に、かなりの攪乱を受けていることが把握された。しかし、大手北櫓南面石積みの下面のレベルが判明したことにより（4トレンチ）、現地表面から50cm上に江戸時代の虎口の地表面が存在したことが解明された。大手門には、凝灰岩を削り貫いた排水溝を伴った平坦面が並存したものと推察される。

南北櫓跡の基底部は、地山である凝灰岩を、虎口のプランに沿って垂直に掘削することによって高石垣を築くための根切り地業としている。この根切り地業は、南北両櫓において共に確認されており、石垣の表面観察や出土遺物からも、慶長期に施されたものである可能性が高いと考えている。虎口は、左曲がりの虎口で、開口部の幅は約5.0m、左面石垣の奥行きは約4mである。虎口の突き当たりに関しては、石垣が確認されず垂直に削り出された凝灰岩が切り立った状態で検出された（写真図版4-6参照）。本来は、北櫓南面のように、貼石状の石積みがあったものと思われるが現時点において、その構造は不明である。虎口を左に曲がった後は、2m弱の幅に縮小し、右に折れるものと考えられる。

虎口に関しては、北櫓と南櫓の地業に、明確な差異が見受けられる。北櫓が張り石状の施工であることに対し、南櫓に関しては高石垣を築いている。しかし、前述した通り、石垣の表面観察から、近代の積みなおしが想定される。この積み直しの際に、北櫓の石材を利用して南櫓を高く積みなおした可能性を想定しておかなければならない。



第8図 大手門北櫓南面・西面立面実測図【石垣番号6・7】(1/100)

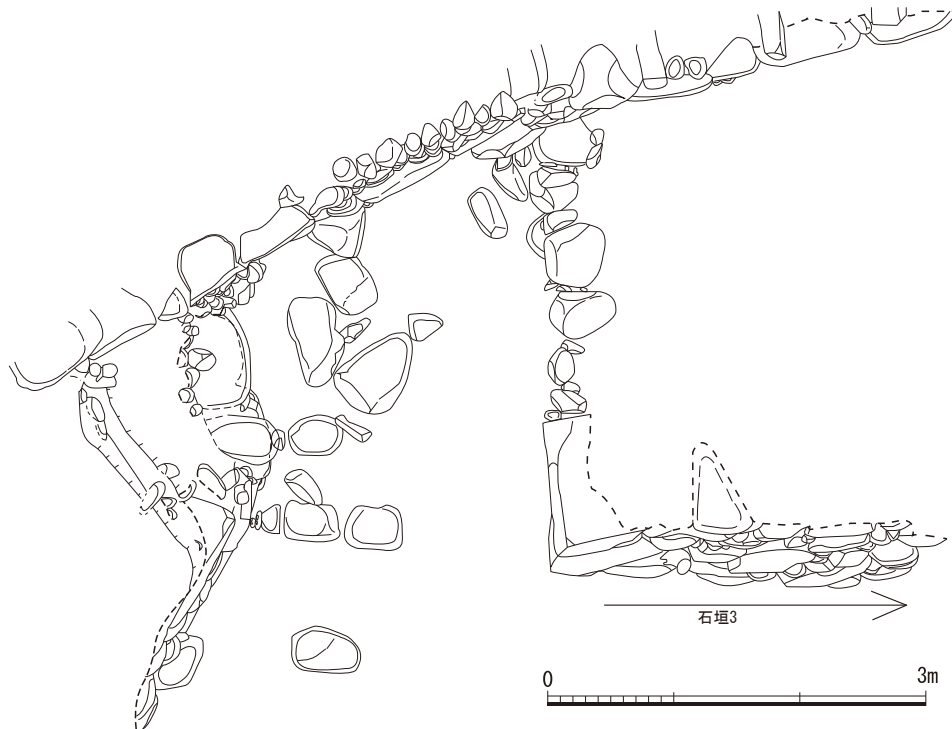
4. 搦手口 (第2次調査2トレンチ) (第9図 写真図版2・3)

搦手口は、北側郭からの通用門的な位置付けで、繩張的には本丸郭の搦手口と評価される(第9図参照)。向かって門の入り口側からの構造を見ると、正面に3段の階段が確認され(写真図版2-7参照)、伝天守南西角にあたる左側(東側)は鑄(シノギ)角で通路から本丸方向へ石垣が延び(写真図版2-7参照)、右側(西側)は大手門北櫓から続く石垣の東端にあたる算木積みが2~3段確認される(写真図版2-7及び3-2参照)。算木には、鑿突仕上げが施されている。

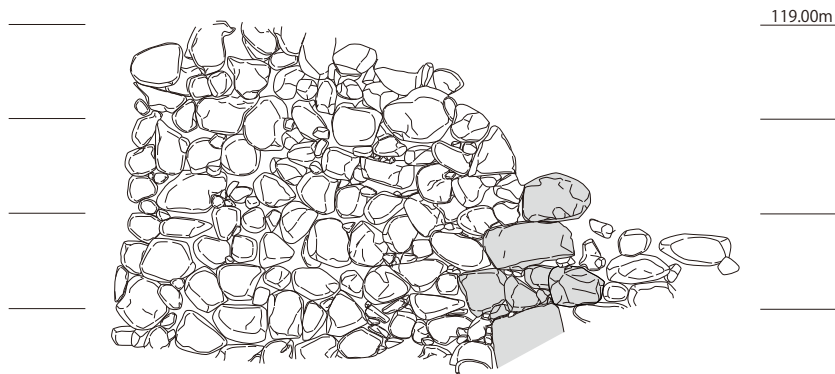
おそらく、この算木の上に小規模な「門」が構築されていたものと想定され、搦手口から本丸へは、半地下式の通路を通る構造となっていたものと考えられる。また、搦手口であることから、左側の伝天守側(本丸北櫓)へ曲げる等、虎口構造を有している可能性も考えておきたい。

また、石垣3に関しては中央部に「破城」らしき痕跡が見受けられる(写真図版4-2参照)。今後、これが江戸期或るは明治期の破城痕跡であるか、または倒壊痕跡であるのかを確かめる必要がある。

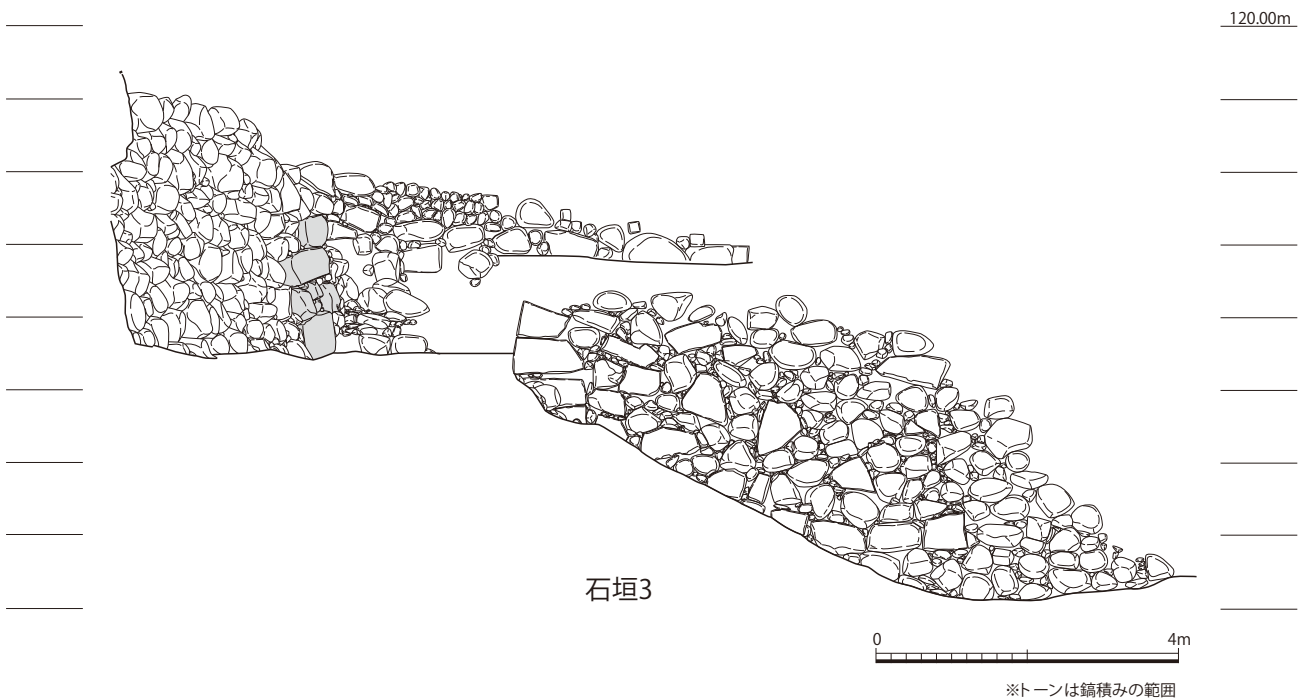
遺物に関しては、16世紀後半~17世紀初頭と考えられる朝鮮系陶器碗の破片等が出土している(写真図版4-1参照)。



第9図 搦手口平面実測図【発掘2次2トレンチ】(1/25)



石垣3



石垣3

第10図 搦手口石垣立面実測図【石垣番号3】(1/100)

小結 (大手門 (虎口・南北櫓跡)・搦手口)

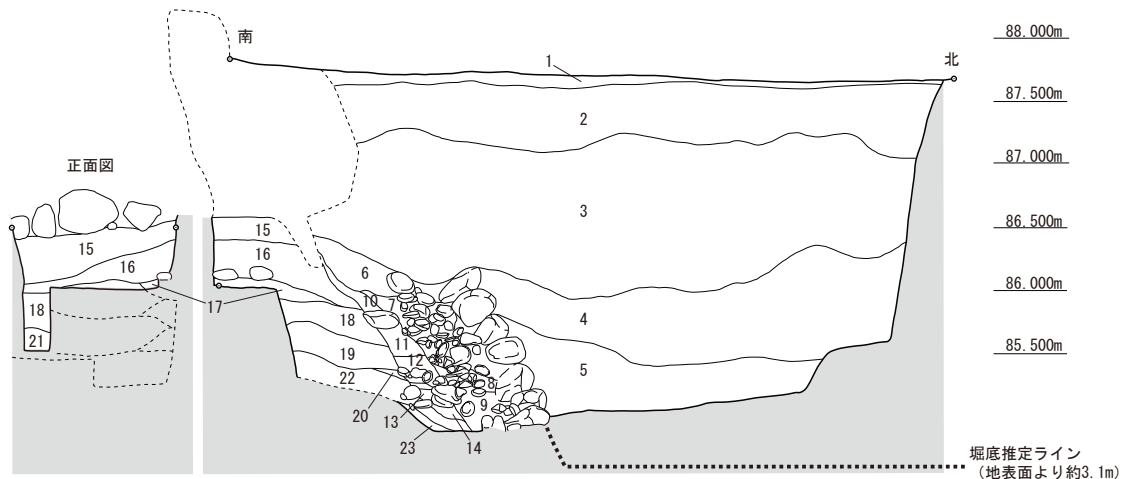
本丸への2つの出入り口に関しては、大手口から多くの瓦が出土したことから、瓦葺の大手門が存在したことが想定される。しかし、搦手口に関しては、瓦の出土は見受けられず、その門構造の解明にまでは至らなかった。今回の調査においては、北側の曲輪から搦手口に到る通路にも高石垣が施されていることが判明したため(石垣3)、より立体的な永山城跡の構造の解明に関しては大きく進展した。また、平面プランとしては、大手門北側櫓と搦手門を繋ぐ石垣に関しても、連続する鑄(シノギ)積みによって、横矢掛かりを意識した倭城的「屏風折」の石垣の存在が明らかとなった(第10図・第23図/写真図版2参照)。

今後、元和の石川期、寛文の細川期、天和の松平等に大規模な改変段階が存在しないか確認してゆく必要がある。

5. 堀 (第 11・12 図 写真図版 4)

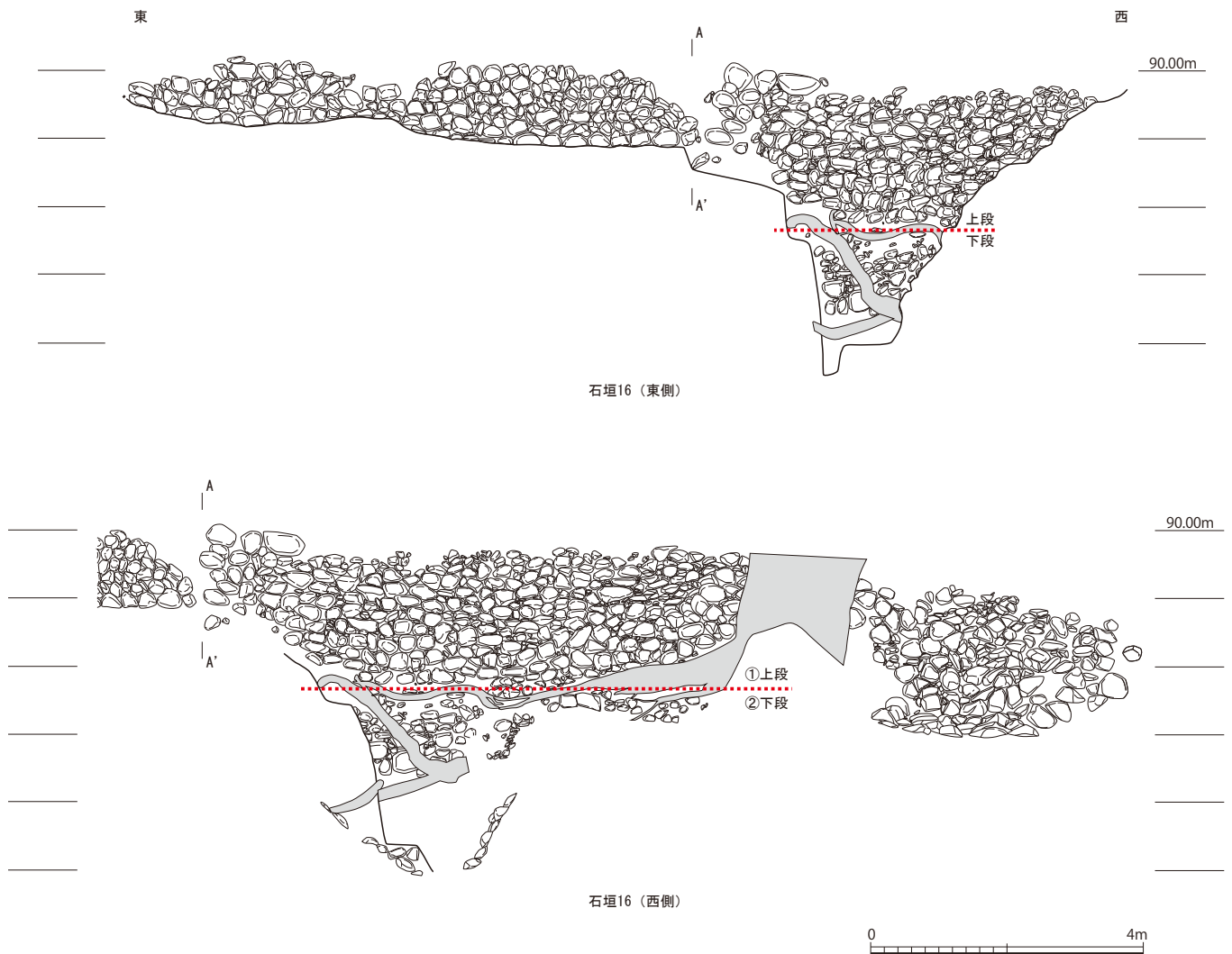
調査区は、堀の北西側、寛文年間の細川期に改修されたとされる通称「肥後殿堀」に、玉石垣の検出と堀の構造の確認を目的として設定した(発掘 3 次 3 トレンチ)。石垣は、大まかに上下 2 段(以下、上段・下段)に分けられる。

石垣下段の土層を観察すると(第 12 図参照)、1～5 層まではコンクリートを含み、現代における埋め戻し客土である事が把握される。6～14 層は石垣の裏込めになるが、6・7・10・11 層からは近代の磁器が検出されるため、この層と同レベルのネズミノギ積みの石垣も近代の積みなおしであると推察される。8・9・12・13・14 層及びこの層と同レベルの石垣に関しては、今後の課題であるが、同レベルの石垣は「ネズミノギ」積みである。15～22 層に関しては、石垣構築に伴う整地層で、黒褐色・灰褐色・黄褐色の粘質土の互層で形成されている。堀の底面に関しては、重機を用いて掘り下げを一部でおこなった。結果的に、湧水のため目視での確認はできなかったが、堀の底は「箱堀」になるとの推定に至った。なお、現地表面から底面までの深さは、約 3.1 m を測る。石垣の観察から、石垣下段は、「ネズミノギ」積みの上部と、野面積みの石材の面を揃えて構築されている最下部とに分けることができる。状況的に最下部に関しては、江戸時代のものである可能性



- 1 灰黄褐色 (Hue10YR5/2) 粘質なし、粒子細かい。非常に固くしまっている。
- 2 暗赤褐色 (Hue5YR3/4) 粘質あり、粒子荒く、固くしまっている。空き缶、レンガ、アスファルトを多く含む。
- 3 黒褐色 (Hue10YR3/2) 粘質あまりない。粒子荒い。固くしまっている。この層の石垣側に、鉄のフェンスが検出された。
- 4 黒褐色 (Hue10YR2/2) 粘質はあまりなく、粒子荒い。固くしまっている。まさ土のような砂が多く含まれる。
- 5 黒褐色 (Hue10YR2/2) 粘質はあまりなく、粒子荒い。固くしまっている。アスファルトやコンクリートが付着した石を含む。
- 6 暗褐色 (Hue10YR3/4) 粘質あり。粒子は若干荒い。固くしまっている。土中の礫にはコンクリートが付着している。
- 7 暗褐色 (Hue10YR3/4) 粘質若干あり。粒子は粗く、固くしまっている。コンクリートが付着した礫含む。(礫層)現代。
- 8 黒褐色 (Hue10YR3/2)+にぶい黄褐色 (Hue10YR4/3) 粘質少しあり、粒子は粗く、しまっている。
黒褐色土の中に微量のにぶい黄褐色土を含む。(礫層)コンクリートなし。
- 9 黒褐色 (Hue10YR3/2) 粘質あり。粒子は荒く、少ししまっている。微量の褐色土を含む。
- 10 褐色 (Hue7.5YR4/4) 粘質あり。粒子細かい。固くしまっている。
- 11 黒褐色 (Hue7.5YR3/2) 粘質あり。粒子は荒く、固くしまっている。
- 12 褐色 (Hue7.5YR3/3) 粘質あり。粒子は荒く、しまっている。
- 13 褐色 (Hue10YR4/4) 粘質あり。粒子は荒く、10層よりはしまっている。
- 14 褐灰色 (Hue10YR4/1) 粘質あり。粒子荒い。やや泥質。
- 15 黒色土 (Hue10YR2/1) 粘質あまりない。粒子は荒く、非常に固くしまっている。
- 16 灰黄褐 (Hue10YR4/2)+褐色 (Hue10YR4/6) 粘質あり。粒子細かく、非常に固くしまっている。灰黄褐色土中に、褐色土をまばらに含んでいる。
- 17 灰黄褐 (Hue10YR4/2)+暗赤褐 (Hue5YR3/6) 粘土はあまりない。粒子荒く、しまりはあまりない。
- 18 褐灰色 (Hue10YR4/1) 粘質なし。粒子細かい。固くしまっている。土中に非常に固い2cmほどの黒色 (Hue10YR1.7/1) のブロックを含む。
- 19 にぶい黄褐色 (Hue10YR4/3) 粘質なし。粒子荒く、しまりもあまりない。
- 20 褐色 (Hue10YR4/4) 粘質あり。粒子細かく、しまっている。
- 21 黒褐色土 (Hue10YR2/1) 粘質なし。粒子荒い。非常に固くしまっている(スコップささらないほど)
- 22 褐色 (Hue10YR4/6) 粘質なし。粒子とても細かい。しまっている。(地山か)
- 23 にぶい黄褐色 (Hue10YR5/4) 粘質あり。粒子荒い。2cmほどの丸石を含む。少ししまっている。(地山か)

第 11 図 堀土層断面図 (1/60)



第12図 堀石垣立面実測図【石垣番号16】(1/100)

を有する。

上段の石垣に関しても、石積みの観察から、上部と下部に分けることができる。上段に関しては、聞き取り調査により、戦後まもなくして近隣住民の手により積みなおされたものであることが判明している。下段に関しては、垂直に積まれており、元来、あまり高くない石積みであったと考えられる。この垂直に積まれた石積に関しては、整地層である15層直上に構築されていることから、現時点で江戸時代のものである可能性が高いと判断している。

整理をすると、「肥後殿堀」の城側の石垣は、大きく2段の石積みによって構築されており、上下2段とも基底部分のみがプライマリーなものである可能性が高く、その上部に関しては、共に近現代の積み直しであるということが理解される。

この永山城北側の堀に関しては、絵図面に橋もしくは陸橋が描かれているものもあり、最初期の永山城北ノ丸(三ノ丸)大手門が存在した可能性が指摘される場所である。今後、この「肥後殿堀」に伴う石垣16の西側に、橋或いは陸橋の痕跡が確認される可能性がある。

6. 曲輪

南東側にあたる曲輪の調査は、現在ゲートボール場として使用されている付近において、櫓跡の確認（6・7トレンチ）及びより古い時期の石垣の有無の確認（4～6トレンチ）を目的として実施した。

まず、4トレンチでは、壁に沿って巡らされているコンクリート製の側溝を埋める際の栗石を検出したものの、古い時期の石垣の存在を示すような石材は確認されなかった。さらに東側の白壁の一部では、大量の玉石や瓦が出土した。玉石は20～30cmの大きさのものが中心であった。

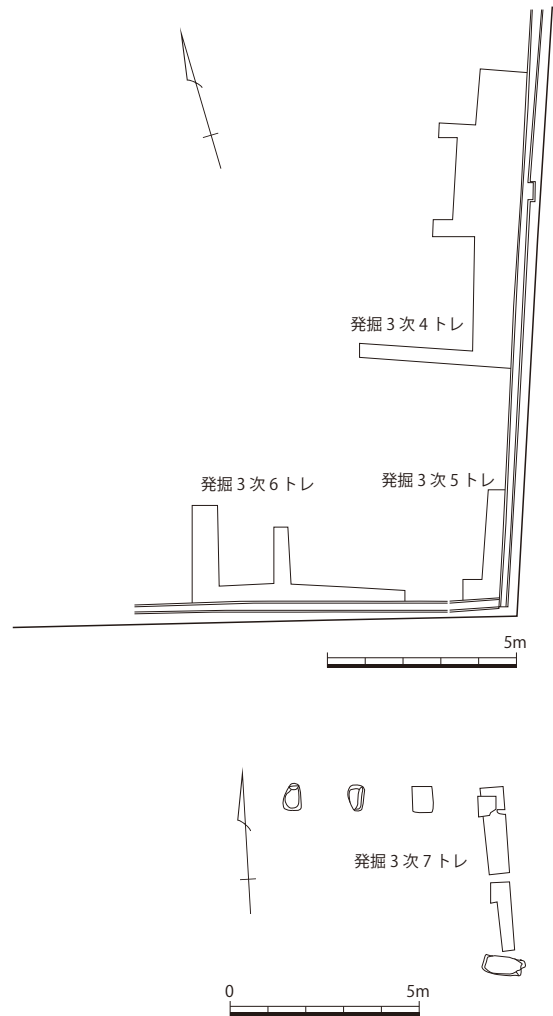
また、石の出土状況については、部分的に規則的に並べられたような痕跡も見受けられ、なんらかの施設である可能性も考えられたが、明確に判断できる材料がなく、断定するには至らなかった。

5トレンチでは、4トレンチと同様にコンクリート製の側溝を埋める際の栗石を検出したものの、古い時期の石垣の存在を示すような石材は確認されなかった。

6トレンチでは、現地表面に確認されていた建物の礎石とみられる石材を中心にトレンチを設定して掘り下げをおこなったが、側溝の内側にも延長して、建物の礎石として展開するか確認を行ったが、検出されなかった。

7トレンチでは、ゲートボール場西側にもあった礎石とみられる石材が露出している部分について、その石を中心に建物の礎石として展開する石があるか掘り下げを行ったが、検出することはできなかった。

なお、明確な遺構が確認できなかったことから、詳細な実測は行っておらず、トレンチの位置図のみの掲載としている。



第13図 曲輪調査位置図 (1/200)



写真7
発掘3次4トレンチ



写真8
発掘3次5トレンチ



写真9
発掘3次6トレンチ



写真10
発掘3次7トレンチ

7. 出土遺物

本丸曲輪からは、小破片のものが多かったが、比較的上手の遺物が出土している。今回の出土遺物は、大きく、国産陶磁器・貿易陶磁、金属製品、瓦の4種に大別して掲載した。

国産陶器に関しては、肥前産陶器の胎土目積み段階（1590～1610年代）及び砂目積み段階（1610～1630年代）に帰属する遺物を主体とする。他の国産陶器に関しては、丹波産焼締陶器播鉢や備前産焼締陶器播鉢が出土しており、丹波焼の播鉢に関しては16世紀末～17世紀初頭、備前焼に関しては斜行播り目が入る1570年代以降の製品である。国産磁器は、肥前産磁器で構成され、こちらは17世紀中頃のものまでを含む。貿易陶磁器に関しては、明代の景德鎮系青花及び朝鮮産陶器によって構成される。

1は唐津系陶器の盤或いは大皿である。藁灰釉を施し若干青みを帯びた発色をしている。17世紀初頭のものであろう。2は胎土目段階の土灰釉が施された唐津焼の皿で、口縁部には「なぶり縁装飾」が施されている。3は明代の景德鎮系青花皿である。高台内にはカンナ削り痕が観察され、16世紀末～17世紀初頭の製品である。4は唐津系陶器刷毛目皿である。見込み部分に彫り込みで二重圏線を施し、その内側及び高台に砂目積み痕跡が確認される。高台内にも釉薬が施されている。5は肥前産磁器染付皿で、内底面に菊花文、その周縁に宝文が施されるものと考えられる。17世紀中頃の製品であると考えられる。6は南櫓北面の大手虎口整地層内から検出されたもので、17世紀後半に比定される遺物である。この時期に大手口の構造が改変された可能性を示唆する重要な遺物である。7・8は共に近代の遺物で、大手口にこの時期に手が加えられた事を示す遺物である。9は朝鮮産雑釉陶器碗で、一般的に「ととや」茶碗と呼ばれる形のものである。16世紀末頃の製品である。10は朝鮮産磁器白磁皿であると考えられるが、佐賀県武雄市に所在する内野山北窯の上質の中手皿である可能性がある。いずれにしても、17世紀前半の製作年代が考えられる。重ね積み時の目跡が、見込み部分及び高台畳付部分に確認される。高台内底面が外面よりも一段深く削り出されているのが特徴である。11は胎土目積み段階の唐津系陶器碗である。口唇部に鉄釉を施し、「皮鯨手」と呼ばれる意匠が施されている。12は天目茶碗の形を呈した唐津系陶器碗の口縁部である。藁灰釉を施している。16世紀末から17世紀初頭の製品である。13は砂目積み段階の唐津系陶器溝縁皿である。

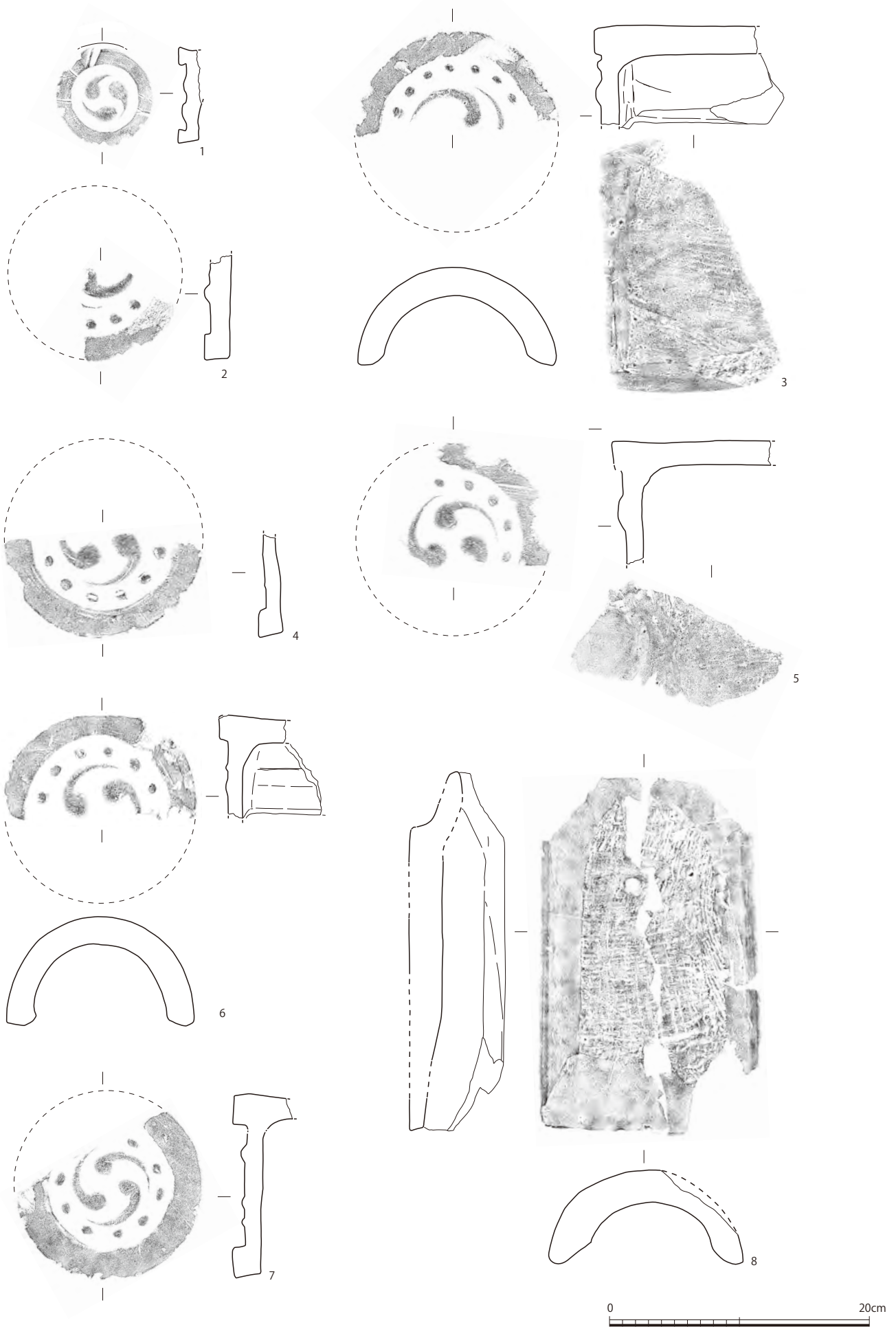
14は胎土目積み段階の土灰釉が施された唐津系陶器碗である。高台内まで施釉が成されている。15は唐津系陶器皿である。土灰釉に藁灰釉が白濁して発色している。胎土目積み段階の製品と考えられる。16は上野焼系陶器碗である。器面には、鉄釉の上に藁灰釉が施され上野系独特の青く発色をしている。17世紀初頭の製品であると考えられる。碗の内側には、灰降りが付着している。17は胎土目積み段階の唐津系陶器の皿或いは向付となる、いわゆる絵唐津製品である。18は肥前産陶器碗で、18世紀前半の製品である。19は胎土目積み段階の唐津系陶器碗で、高台は碁笥底に近い形状を呈する。20は唐津系陶器碗の高台部分の破片である。内外面及び高台内まで鉄釉が施されており、見込みには「蛇ノ目釉ハギ」が施されている。17世紀後半の製品であると考えられる。21は唐津系陶器壺の肩部の破片で、器面には彫り込み装飾が施されており、かなり上手の製品である。22は備前産焼締陶器播鉢であり、播り目が斜めに入っており、いわゆる「交差播目」が確認される1570年代以降の製品である。23は丹波焼の播鉢で、17世紀初頭の製品である。24～26は土師質土器の皿である。口縁部に面取りが施されており、26には灯明芯痕が確認される。

27～29は永山城跡内に点在する横穴墓群の時期に帰属するものと考えられる古墳時代の遺物である。27は土師器の器高坏の脚部の破片である。断面観察において、坏部と脚部との接合痕跡が確認される。器面調整としては、外面に縦方向のヘラによる面取り調整、内面には回転ヘラケズリ調整が施されている。28は、須恵器高坏脚部の透かし部分の破片である。29も須恵器高坏脚部の破片である。

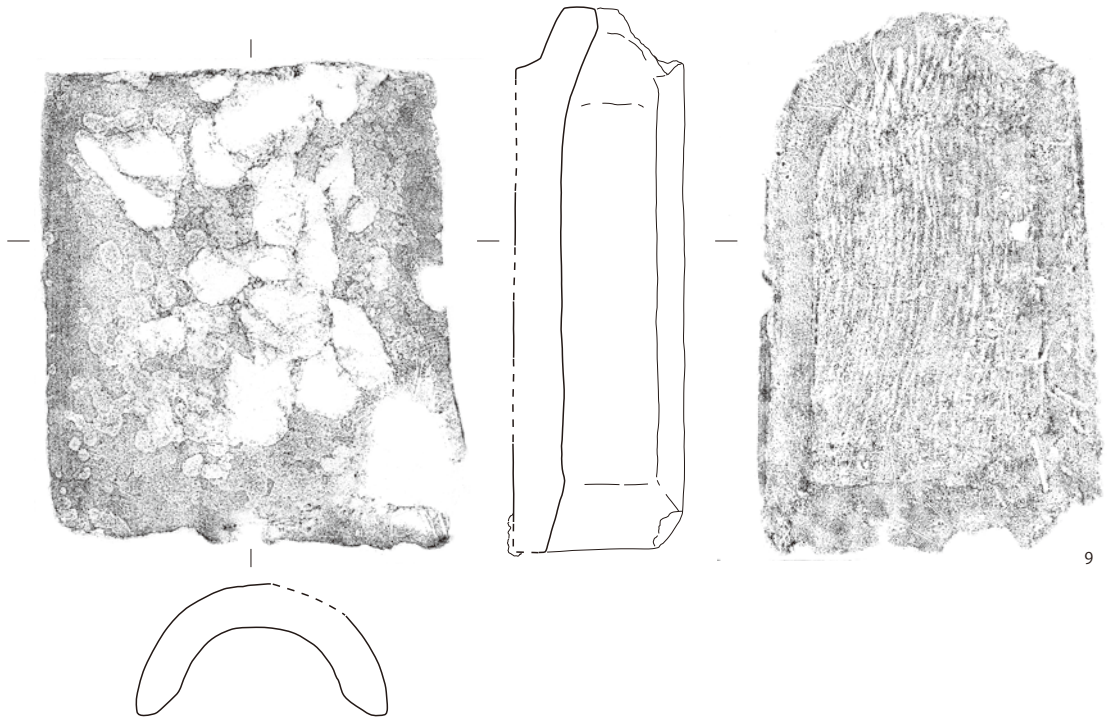
金属製品としては、明治8年の二銭銅貨や昭和30年の50円ニッケル貨等、近現代の銭貨等も出土している



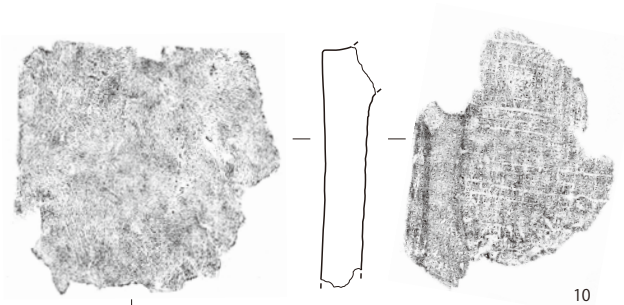
第14图 出土遺物実測図1 (1/3)



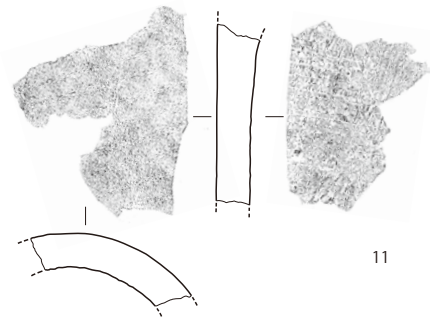
第15図 出土遺物実測図2(1/4)



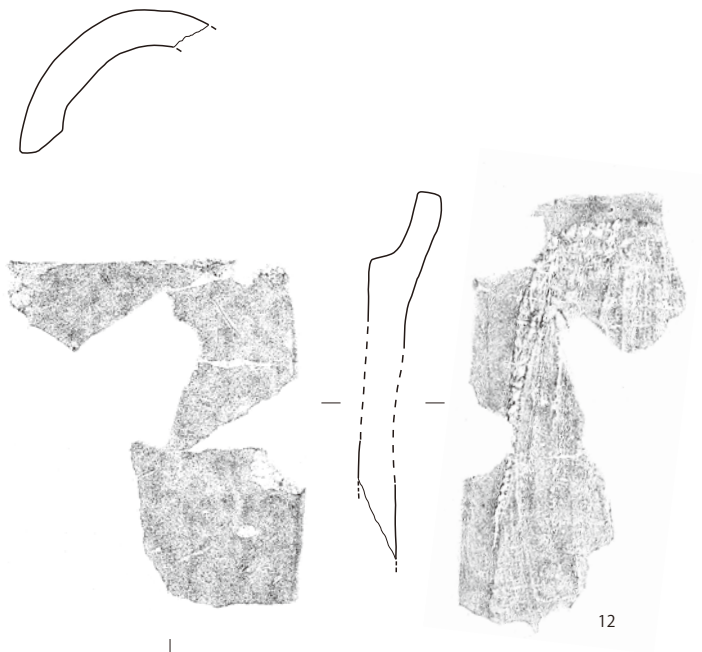
9



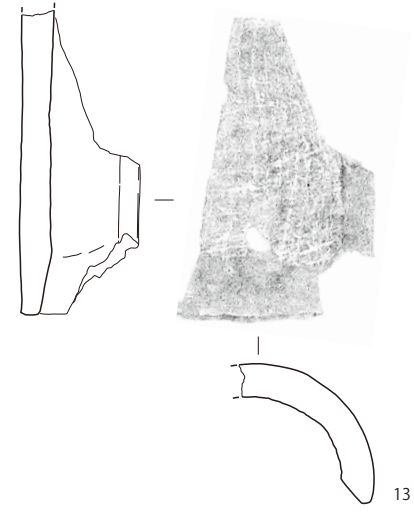
10



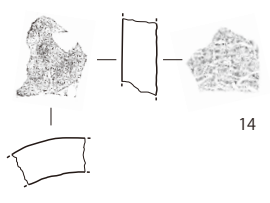
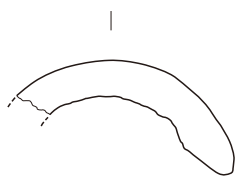
11



12



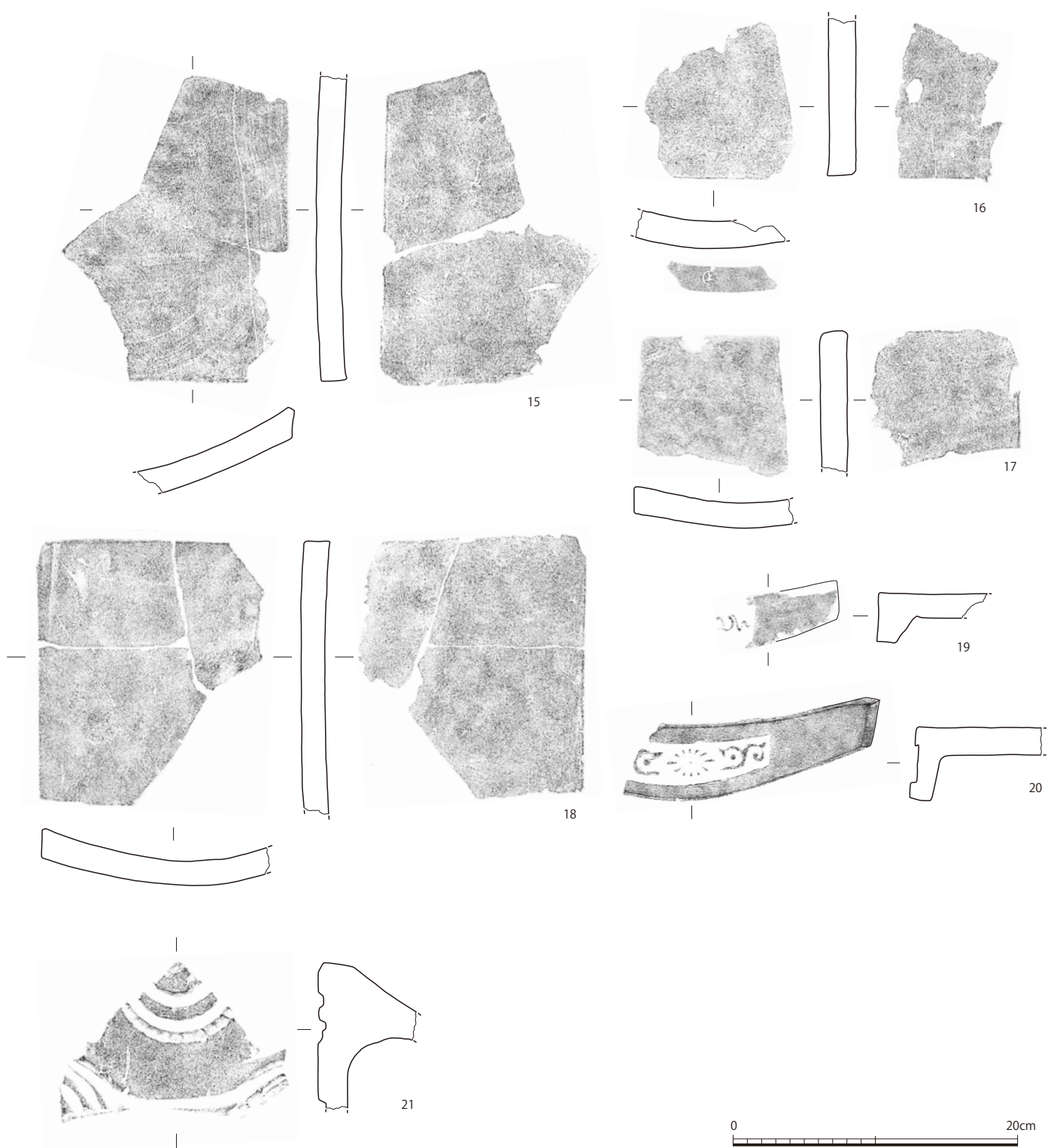
13



14



第16図 出土遺物実測図3(1/4)



第17図 出土遺物実測図 4(1/4)

が(写真図版5)、ここでは特に、第2次世界大戦時の実弾出土資料(30～33)を挙げておく。大戦時、日田市は、現日田彦山線により、工場のある小倉と繋がっていた事もあり、市内において銃器の組み立てがおこなわれていたとのことである。葉莖内には、散弾とともに火薬も残っている未使用弾である。大戦時の日田を語る上では重要な資料である。

瓦に関しては、大きく軒丸瓦・丸瓦・軒平瓦・平瓦・飾瓦が出土している。1は、明治期の棧瓦の瓦当部分である。裏面には平瓦部分との接合痕跡が観察される。2～7は、軒丸瓦で、全て0区における表採遺物である。瓦当直径は、概ね12～15cm(≒4～5寸)であると推察される。5の丸瓦部分内面には、コビキB調整が確認される。8～14は丸瓦である。8は、丸瓦である。本丸大手口の北櫓南西隅の最下層から出土した遺物で、永山城築城時代に大手門に葺かれた丸瓦であると考えられる。コビキA調整瓦ながらも、内面縁の面取り調整等はコビキB調整瓦的な仕上がりである。9も0区における表採された丸瓦であるが、コビキB調整瓦である。漆喰が付着している。10・11は、本丸大手口の北櫓南西隅の最下層から出土した丸瓦で、コビキB調整瓦である。10には、釘穴が確認される。12は、コビキA調整丸瓦であるが、内面には吊紐の痕跡が明瞭に確認される。13は、参考資料の日田市内所在の隈城表採のコビキB調整瓦である。14は、コビキA調整瓦である。15～18は、平瓦で、全て0区における表採遺物である。表面には調整痕が観察される。16には、㊦の印が確認される。19は、大手口南櫓の北西部から出土した軒平瓦である。築城時期の製品である可能性がある。20・21は、0区における表採遺物である。20は、棧瓦の軒平部分である。21は、文政年間(1818～1829年)の絵図に描かれている現在も祭られている金比羅社の宝珠形の鬼瓦であると考えられる。

第4章 石垣について（3次元計測による解析）

1. 3次元計測の意義について

立体的な遺構である城郭遺跡を3次元測量しておく事は、いうまでもなく有意義な事である。時に発掘調査の成果として、新段階の遺構を破壊した後に、はじめて旧段階の遺構が姿を現すこととなる。時として平面図等の測量は、調査時のある1コマを写真のようにおさめるに留まるが、3次元測量に関しては、遺構の改変過程を3次元で記録するとともに、発掘調査の進展過程をも同時に記録していると言い得る。すなわち、様々な面において記録性が高く、あらゆる側面において最読解することを可能とするものである。

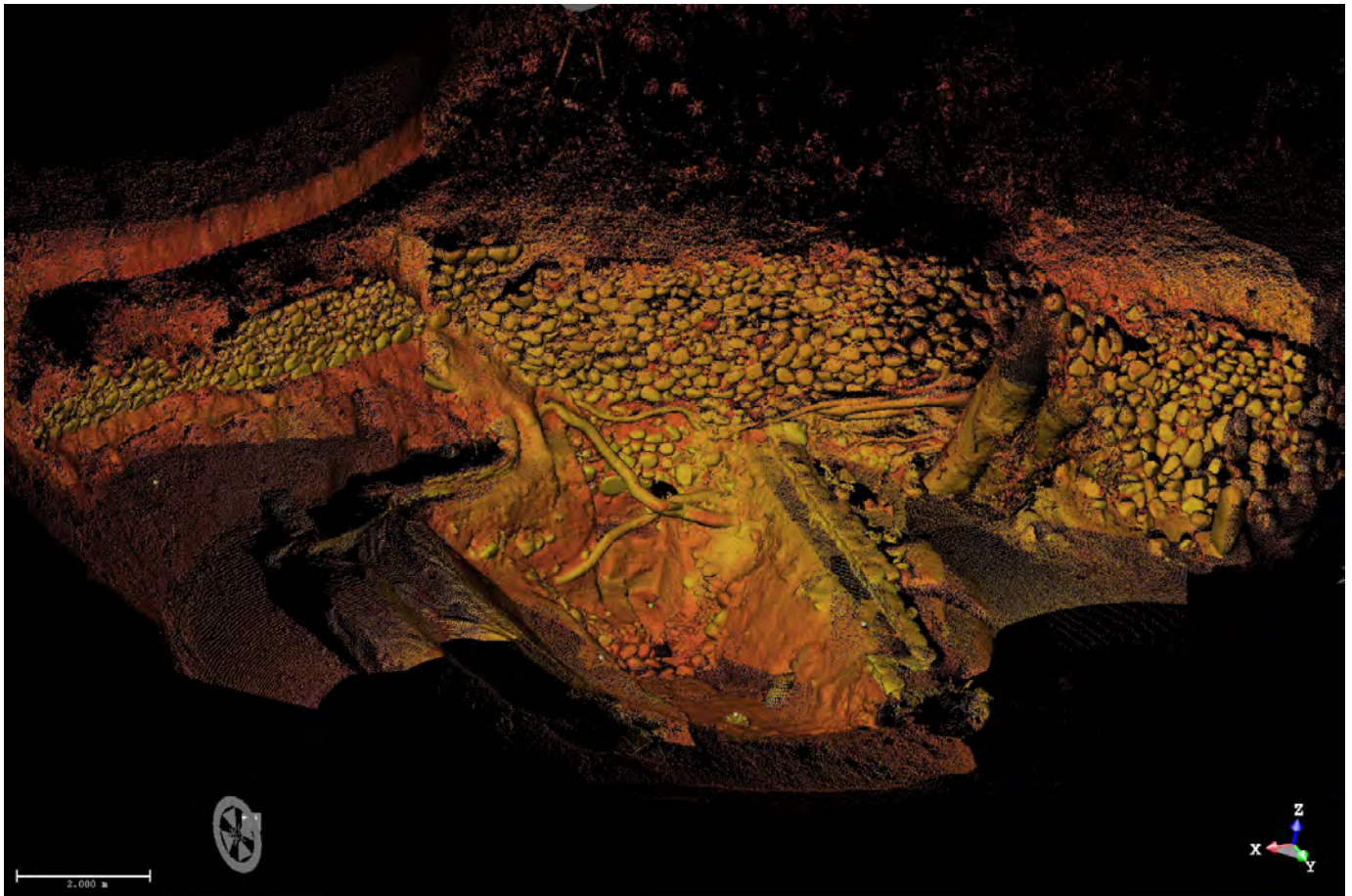
永山城においては、江戸時代或いは明治時代、或いはその両時期に「破城」行為がおこなわれていると考えられるが、この破城行為の様相をとどめている栗石（裏込め石）の散乱した状況等を除去しなければ当初の石垣プランを検出する事はできない。3次元測量は、この破城行為を平面的にも横断面的にも、まさに3次元の視点をもって記録するのである。また、この記録は、災害等で石垣が崩壊した場合の復元作業等においても極めて有用である。

永山城跡の石垣に関しては、石垣の高さに加え、奥行きのある川原石を小口積にした「玉石垣」を用いている為に、石を積み重ねる際の「合わせ」が深く、従来おこなってきたアナログ的な測量では、玉石個々の輪郭を捉えることが困難であった。全国的に玉石垣を用いた城郭は少ないが、永山城にて、この詳細な記録がとれたことについては大変意義のあることである。また、本丸北側の石垣、すなわち大手門北側櫓と搦手門を繋ぐ連続する鎧（シノギ）積みによって「屏風折」の石垣の存在が明らかとなった。こちらも3次元測量をしておく事により、様々な視点から石垣の積み方の観察を可能とする。

また、活用面においても3次元データから樹木等の不要なデータを削除整理することにより、往時の城郭遺構の状態に近づけてイメージする事を可能とする（第18図参照）。



第18図 合成されたスキャンデータ 1



第19図 合成されたスキャンデータ2

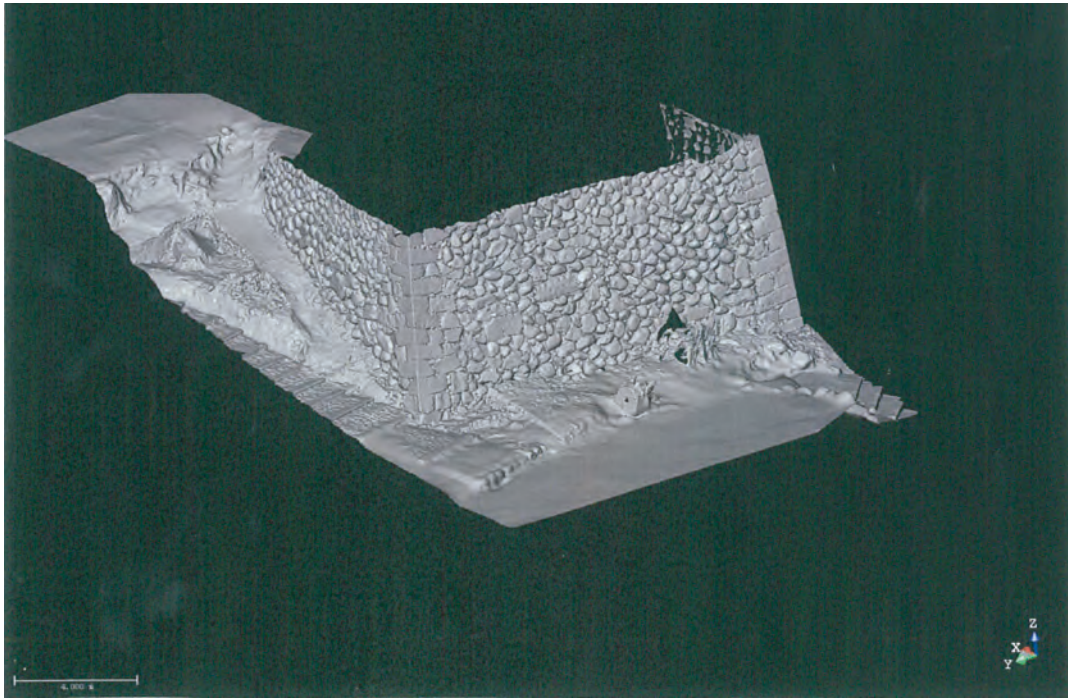
2. 3次元計測の工程について

石垣及び調査区の3次元計測においては、明大工業株式会社の全面的な協力を得て、座標確認後に地上型3Dレーザー・スキャナーを用いておこなった。測量区ごとの計測データは、専用の解析ソフトを使用して、あらかじめ取得したタイポイントと観測した座標等を用いて合成をおこなった(第18・19図参照)。

レーザー・スキャナーを用いた3次元計測に関しては、レーザーが当たった表面((Surface))のみの測量であり(第20図上段参照)、本丸大手口の南櫓のサーフェス・モデル(第20図中段参照)を見ると理解しやすいが、微細な3角形や4角形あるいは5角形を連続させて物体の「表面」を表現するポリゴン・データ(或いはティン・データ)によって構成されている。この図に関しては、櫓石垣上面を3D測量していない段階である。

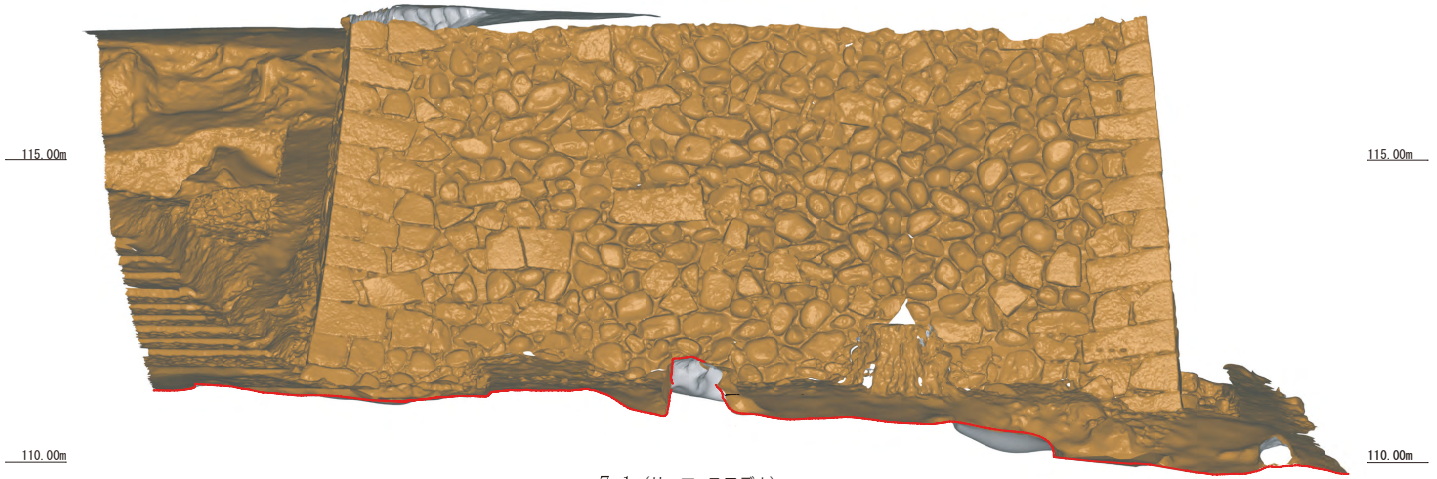
座標軸を用いたデータの合成後、レーザー計測したデータをもとにサーフェスモデルを作製し(第20図中段参照)、対象物或いは地点を撮影した「写真」及び「写真測量で得られたオルソ写真」を、このモデルとマッチングさせて、テクスチャー・マッピングをおこない、テクスチャーモデルを作製した(第20図下段参照)。

「写真」は、撮影時に写真の中心から外周に向かって歪みが生じる「中心投影」画像である。今回、3D測量で得られたデータから作成した平面図及び立面図に関しては、これを座標系にのせることによって歪みの無い「正射投影」画像(オルソ画像)として掲載している。このオルソ画像をトレースすれば旧来の写真実測図となる(第6図参照)。平面図に関しては、3次元モデルを座標系にのせて上部方向から歪みの無い画像を抽出し作製した。立面図は、3次元モデルを設定箇所にて断面をカットし率面方向に向かってオルソ画像を作成している。



120.00m

120.00m



115.00m

115.00m

110.00m

110.00m

7-1 (サーフェスモデル)



115.00m

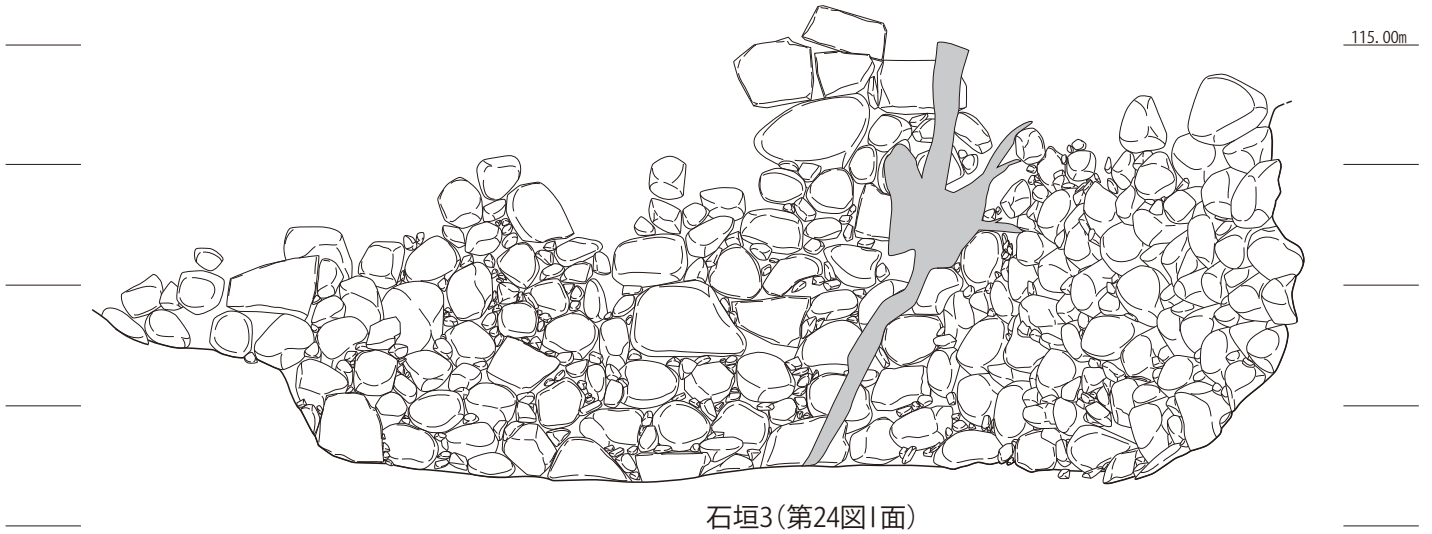
115.00m

110.00m

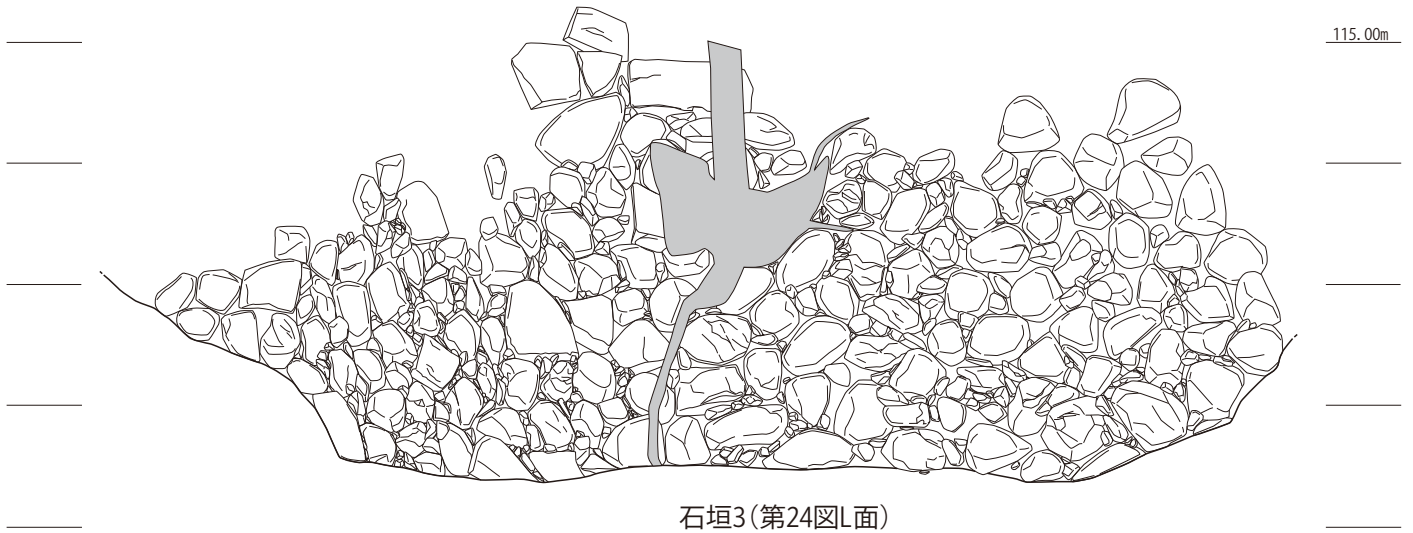
110.00m

7-1 (テクスチャーモデル)

第20図 高石垣3Dデータ



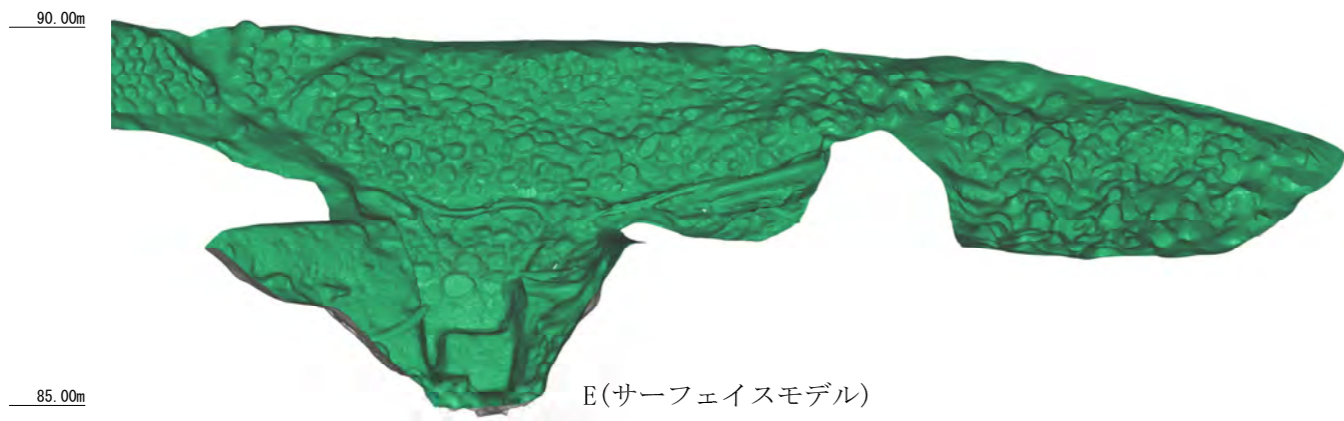
石垣3(第24図I面)



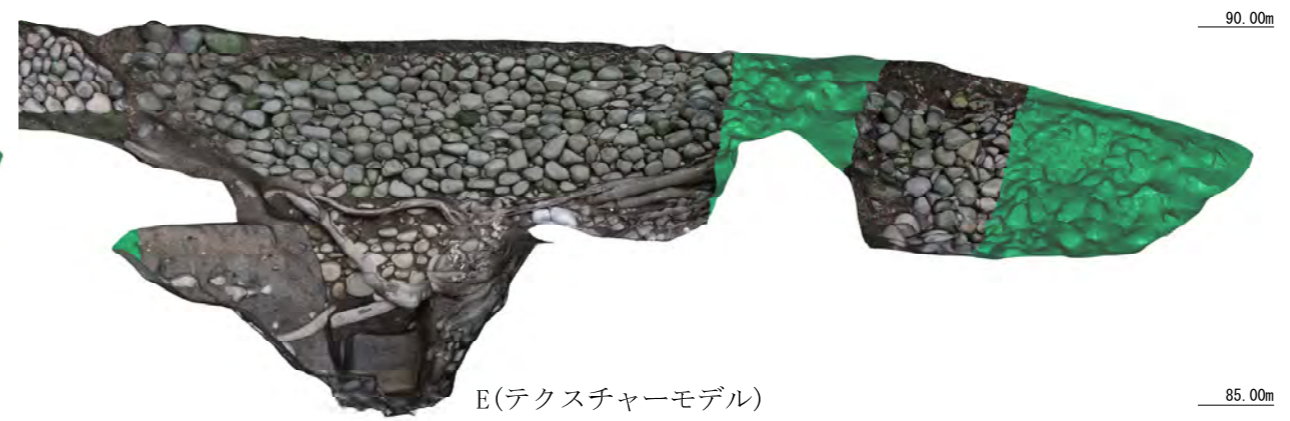
石垣3(第24図L面)



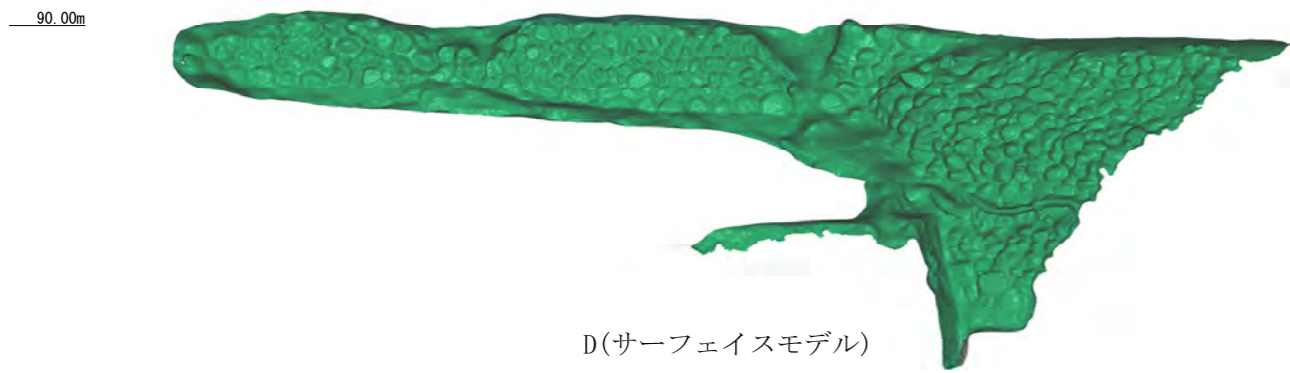
第 2 1 图 搦手口石垣立面实测图【石垣番号 3】(1/100)



E(サーフェイスモデル)



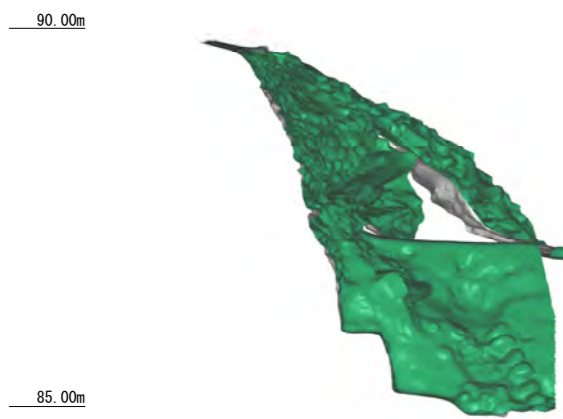
E(テクスチャーモデル)



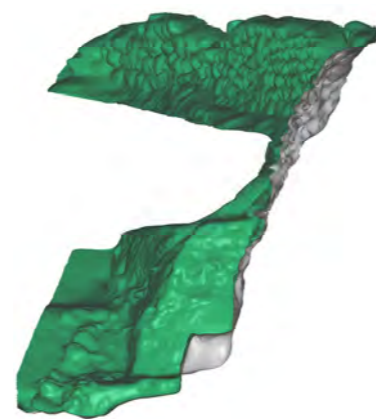
D(サーフェイスモデル)



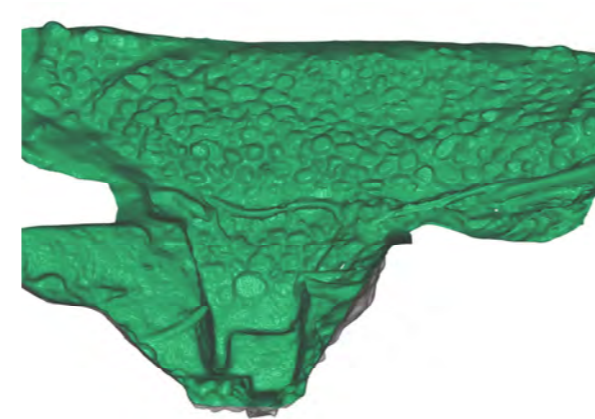
D(テクスチャーモデル)



A(サーフェイスモデル)



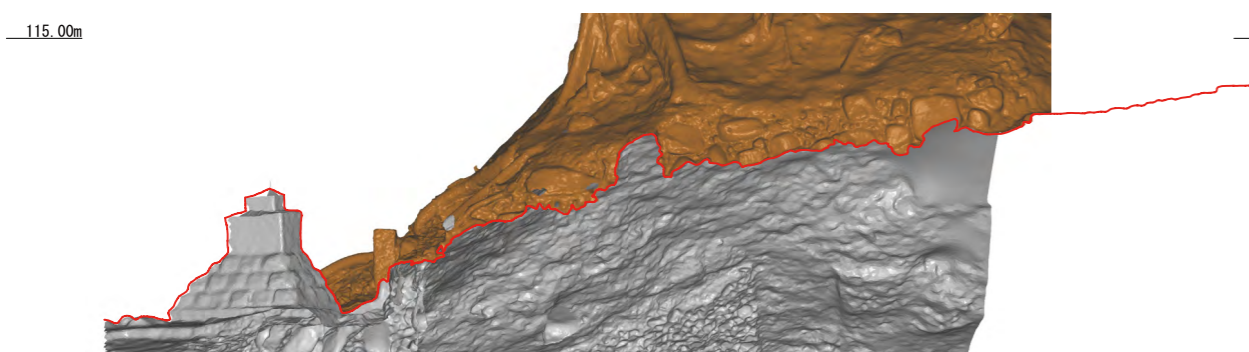
B(サーフェイスモデル)



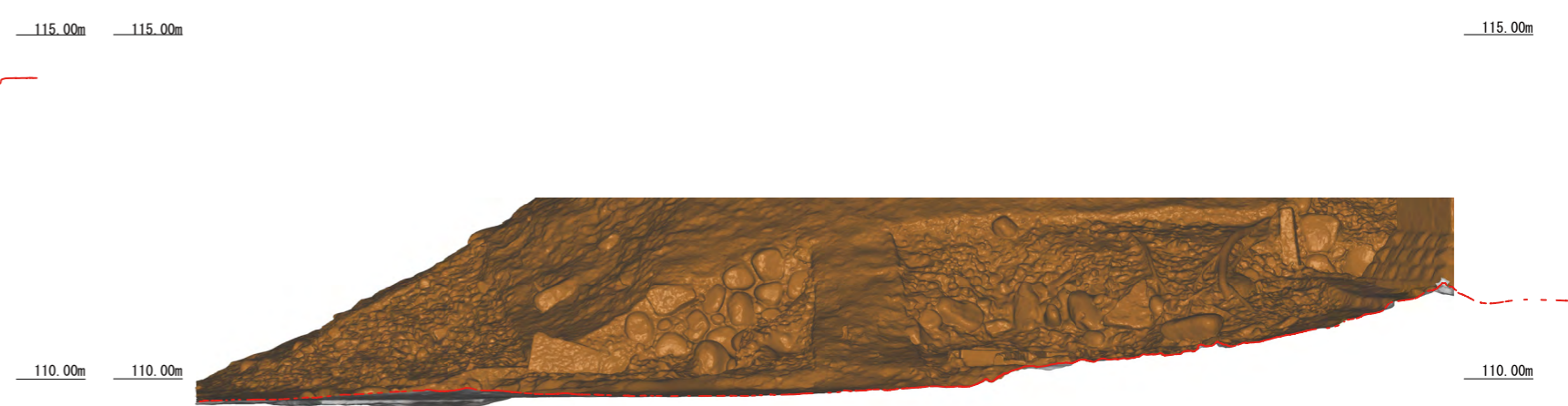
C(サーフェイスモデル)



C(テクスチャーモデル)

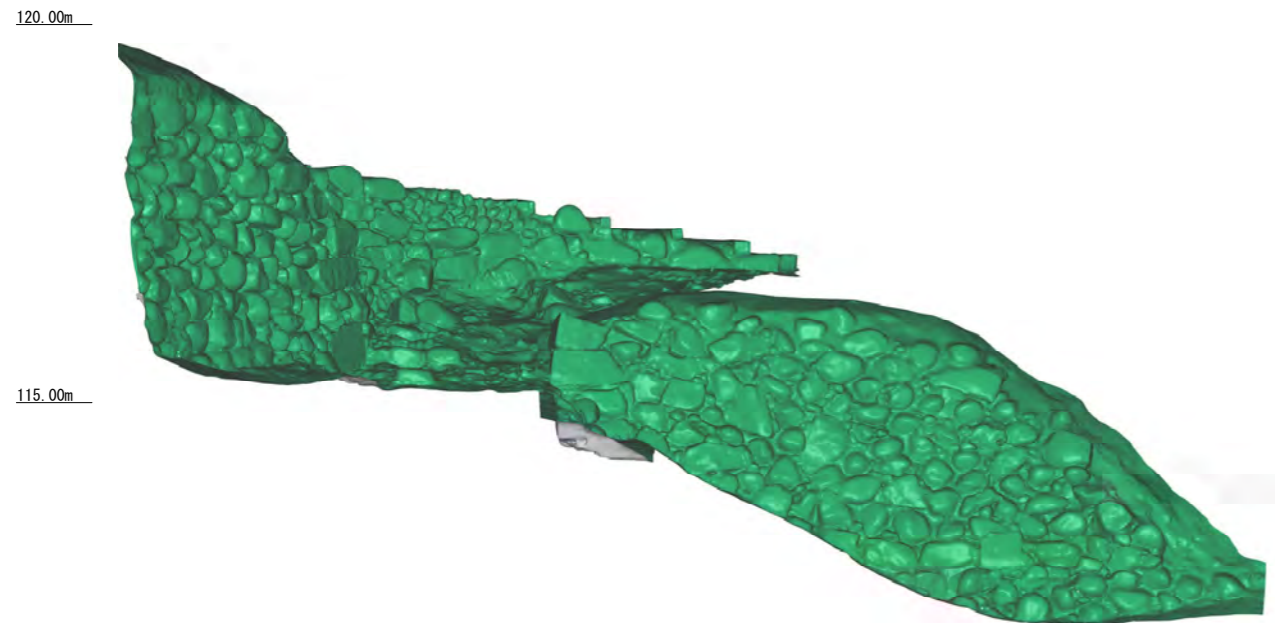


6-1 (サーフェイスモデル)

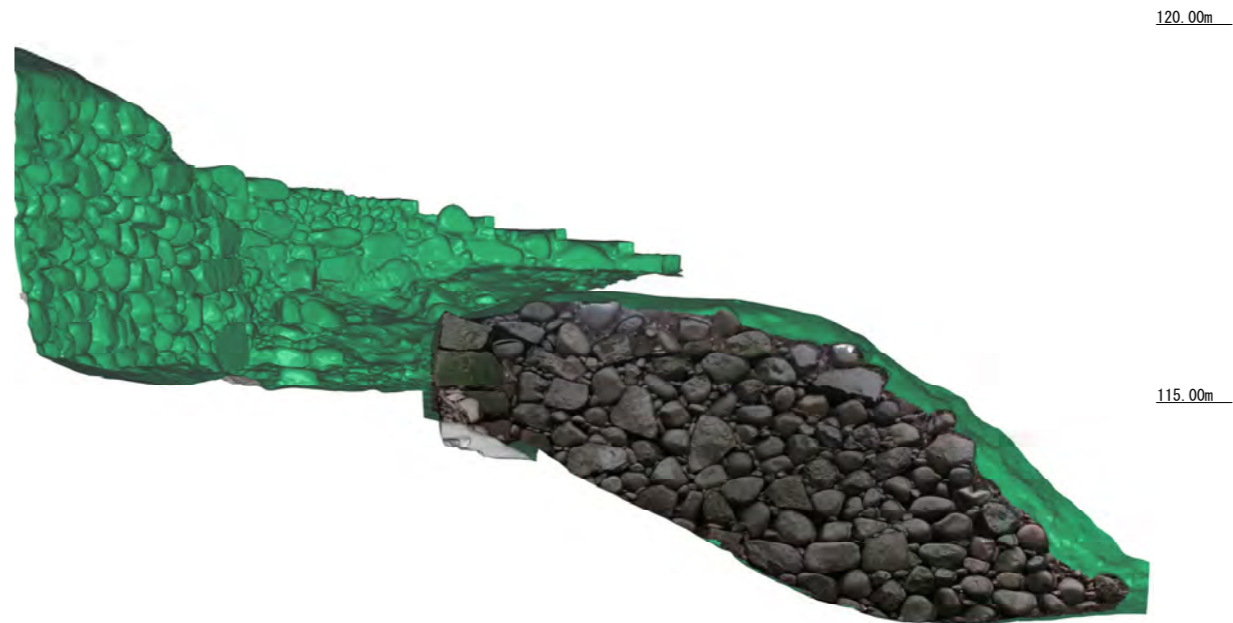


4-1 (サーフェイスモデル)

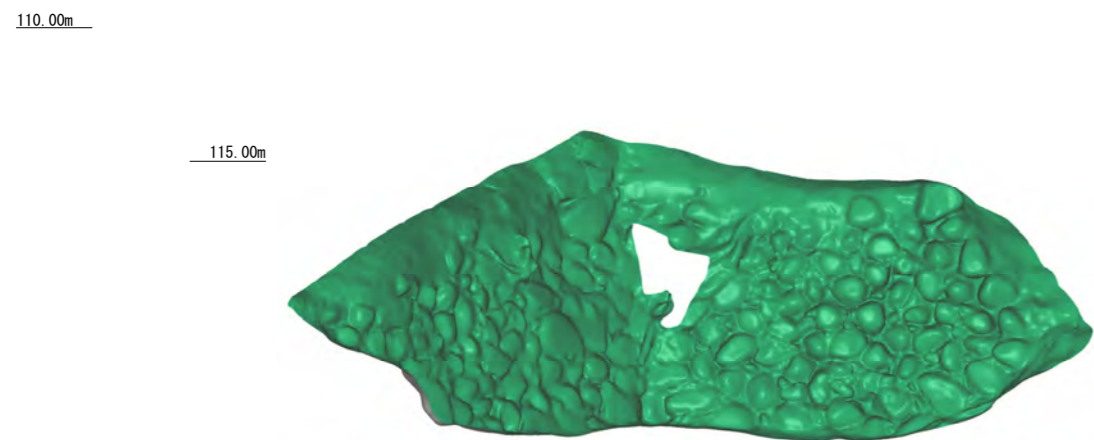
第22図 3Dデータ図面1



F(サーフェイモデル)



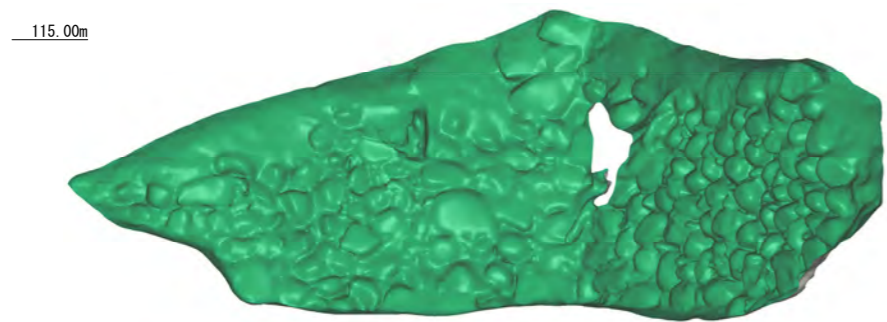
F(テクスチャーモデル)



L(サーフェイモデル)



L(テクスチャーモデル)

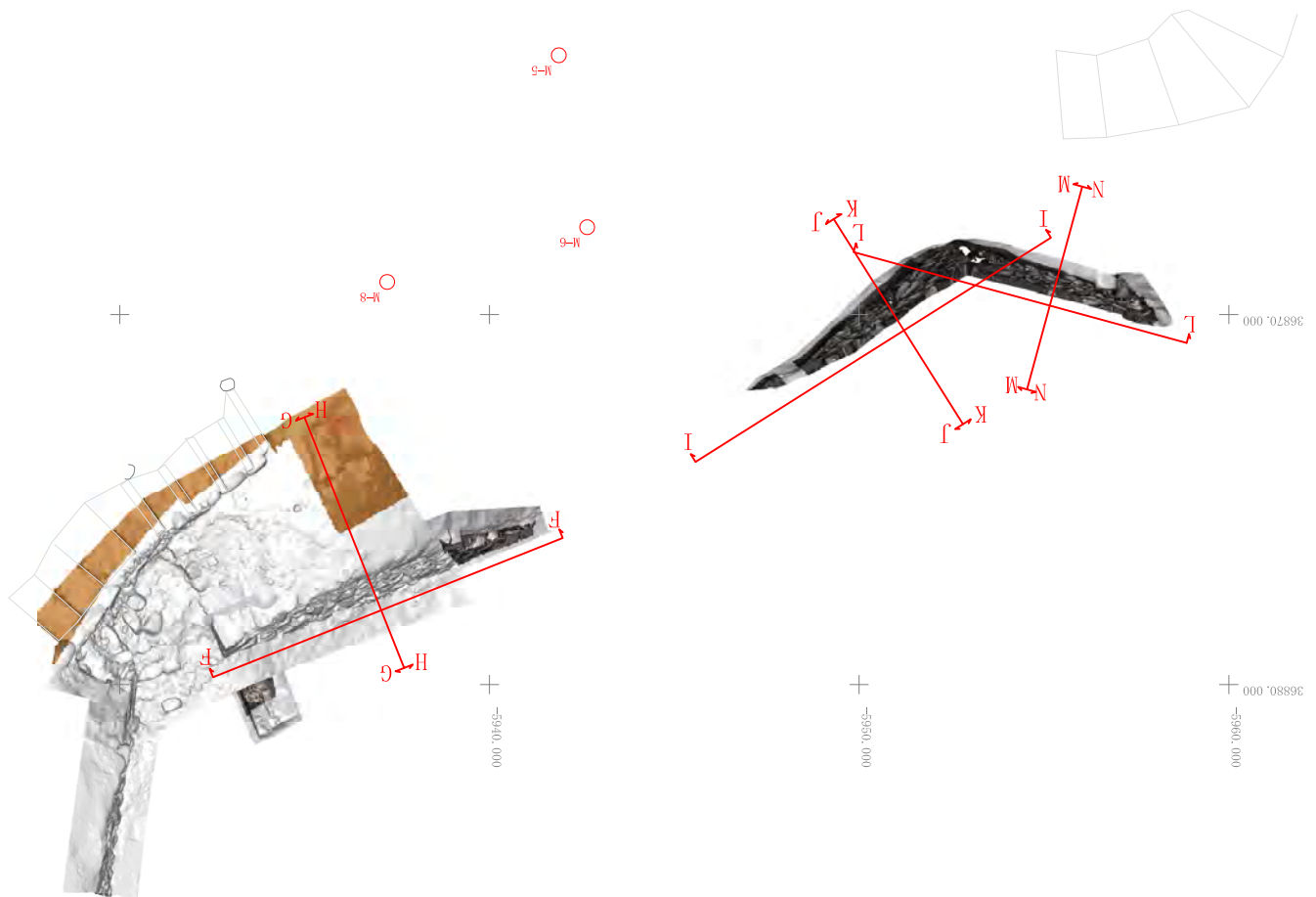


I(サーフェイモデル)



I(テクスチャーモデル)

第23図 3Dデータ図面2



第24図 石垣3 測量位置ポイント図

3. 小結

第4章においては、3次元測量の意義と工程に関して述べてきた。永山城の調査においては、この方法を用いる事によって、本丸北側の石垣、すなわち大手門北側櫓と搦手門を連続する鎬（シノギ）積みによって繋ぐ「屏風折」の石垣の存在を想定させるに至り、実際、「屏風折」の石垣を確認する事ができた（第24図参照）。この「屏風折」の石垣の発見は、本丸大手門から東へ連続する石垣は、本丸南側にも「屏風折」の石垣を施しているものと想定させるに至っている。すなわち、本丸大手門の構造に関して、本丸大手門の「虎口」を軸として南北で対照的なプランを呈している事を推定させ、南北に櫓を築き「虎口」を挟みこむ「渡櫓形式」や、測量調査により若干北櫓の基底面が少し小さい事から南にのみ櫓が着く「隅櫓付形式」のような2つの「櫓門」構造を提示できるように進展させた。

また、「鎬積み」に関しては、「玉石」を用いた事からか、非常に算木の概念の未熟なものであり（10・21・23図参照）、連続する鎬積みによって繋ぐ「屏風折」の石垣が多用されている事実は、朝鮮出兵時、狭小な山城の「郭」に緊急に可能な限り平坦面を構築する必要があった「倭城」の構築法に通じるものでもある。「倭城」が、その後、築城当初の石垣の外側に更に石垣を巡らし、万全の構造を実現していった事実からも、この永山城の石垣が関ヶ原の戦い直後の非常に緊迫した時期に、敢えて「玉石」を用い緊急に築城された段階にあったことを伝えるものであると考えられる。

最後に、3次元測量の有効性は、先にも述べてきたが、梅雨時期や実作業期間が短い場合に現場における（作業時間特に実測及び写真撮影等の時間）を短縮できる面に関しても強調される。勿論、検証作業に関しては、発掘現場が終了する以前に検証を終えておかなければならないし、室内におけるデータ整理及び合成作業には、膨大な時間を必要とすることはいうまでもない。また、3D画像から、何度でもパソコン画面上で調査を検証しなおす事ができる事も重要な点である。最後に永山城跡の3次元測量においては、明大工業株式会社の田原隼人・中井幸洋両氏に多大なるご協力を得たことを、ここに記しておく。

第5章 総括

前章までに報告した、永山城跡の2・3次の発掘調査について、以下、まとめていく。

伝天守跡については、建物の痕跡が確認されなかったものの、北側の石垣において、これまで未確認であった玉石垣が新たに確認されたことにより、櫓等の構築物の存在した可能性がある。

本丸跡に関しては、建物基礎として数個の礎石が確認され、建物が存在していたことが判明し、永山城の中心的な施設があったことをうかがわせる。また北側の石垣において、搦手口から櫓台にかけて、鈍角に屈曲させる、鎬を多用した石垣が確認されたことが特徴といえる。

次に本丸跡の西側出入り口大手門の構造に関しては、南北櫓台で虎口を挟みこむ構造であったといえる。また、多くの瓦が出土したことから、瓦葺の大手門が存在したことがうかがえる。搦手口に関しては、瓦の出土は見受けられず、その門の構造の解明にまでは至らなかった。しかし、北側の曲輪から搦手口に到る通路にも高石垣が施されていることが判明したため、より立体的な永山城跡の構造解明が進展した。

北側の堀跡にある石垣に関しては、後世の積み直しがあるものの、寛文年間に堀が拡張されてできた「肥後殿堀」に伴う石垣、また築城時に近い時期とみられる石垣も確認された。また、堀の深さについては現地表面から約3mであることも判明した。

南東側の曲輪に関しては、城に伴うと考えられる遺構の存在は確認されなかったものの、発掘3次4トレンチにおいて、大量の玉石や瓦が出土しており、城に関わる施設の存在をうかがわせる。

以上の状況から永山城の施設配置を考えた場合、月隈山という独立丘陵の急峻な地形を利用して、小規模な施設を多く作る点が特徴として指摘できる。このような在り方からは中世の山城的様相をうかがうことができ、山城を近世城郭として再整備し、高石垣の天守や本丸跡を備えた可能性が考えられる。

次に出土した遺物についてみていく。まず、国産陶磁器に関しては、肥前産や丹波産・備前産などが出土しており、16世紀末～17世紀中頃までのものが見られる。これは概ね、永山城の築城時から廃城になるまでの期間にあたる。貿易陶磁についても16世紀末～17世紀初頭の製品が見られ、築城時期を裏付けるものと言える。瓦については、大手門に葺かれたと考えられる丸瓦や軒平瓦が出土しており、築城時期の製品である可能性がある。

また、永山城の築城時期を示す遺物のほかに、横穴墓に副葬された須恵器や土師器、廃城後に建てられた金毘羅社のものと考えられる鬼瓦、戦時中の実弾や近現代の銭貨などが出土している。このことは、月隈山が城として機能していた時期だけでなく、様々な時期にわたり、利用されていたことを示すものといえる。

最後に永山城の石垣の特徴を述べる。石垣の基底部には築城直後の慶長期や元和・寛永期の可能性がある石垣が残っているとともに、その改修の変遷を見て取ることができる。さらに算木を除く積み石大半が野面の河原石を利用している点が特徴として指摘できる。これは永山城の立地環境に起因するところが大きいといえるが、このような河原石を利用して、蔵や住宅の建物基礎とする建築技法は豆田町の建物にもよく見られる日田独特のものであり、その礎となったともいえる。

出土遺物観察表 1

挿図番号	遺構名	種別	器種	法 量				調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
				口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 14 図 1	本丸 A-4	磁器	皿	—	—	—	(2.5)	施釉	施釉	精製土	—	灰白色	灰白色	貫入あり
第 14 図 2	本丸 A-4	陶器	皿	—	—	—	(2.9)	施釉	施釉	精製土	—	オリーブ黒色	オリーブ黒色	貫入あり
第 14 図 3	本丸表採	磁器	皿	—	—	(8.1)	(1.2)	施釉	施釉	精製土	—	透明釉	透明釉	景徳鎮青花皿
第 14 図 4	本丸表採	陶器	皿	—	—	(4.5)	(1.8)	施釉	施釉	精製土	—	灰黄褐色	灰黄褐色～灰白色	刷毛目唐津焼皿
第 14 図 5	本丸表採	磁器	碗	(9.0)	—	—	(3.4)	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	肥前産
第 14 図 6	虎口北側 C	磁器	碗	(12.8)	—	—	(5.4)	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	肥前産
第 14 図 7	虎口南側灰褐色土	磁器	碗	—	—	—	(1.2)	施釉	施釉	精製土	—	白色	白色	
第 14 図 8	石垣③西側 1 トレ北	陶器	碗	—	—	—	(1.9)	施釉	施釉	精製土	—	灰白色	灰白色	貫入あり
第 14 図 9	一括	陶器	碗	—	—	—	(2.9)	施釉	施釉	精製土	—	灰オリーブ色	灰オリーブ色	朝鮮白磁
第 14 図 10	本丸 A-4	磁器	皿	—	—	—	(1.8)	施釉	施釉	精製土	—	灰白色	灰白色	貫入あり、朝鮮産か
第 14 図 11	本丸 B-2 整地層直上	陶器	碗	—	—	—	(2.1)	施釉	施釉	精製土	—	灰オリーブ色～オリーブ黒色	灰オリーブ色～オリーブ黒色	
第 14 図 12	本丸 E-3 攪乱	陶器	皿	—	—	—	(2.7)	施釉	施釉	精製土	—	灰オリーブ色	灰オリーブ色	二次被熱
第 14 図 13	本丸 D-3 整地層	陶器	皿	(12.0)	—	—	(2.8)	施釉	施釉	精製土 E	—	灰オリーブ～褐色	灰オリーブ色	貫入あり、唐津系陶器 溝緑皿
第 14 図 14	虎口北側 B 黄色礫層	陶器	皿	—	—	(4.6)	(2.2)	施釉	施釉	精製土	—	黒褐色～にぶい黄褐色	黒褐色	唐津系陶器
第 14 図 15	搦手口黒色層	陶器	碗	(14.0)	—	—	(2.8)	施釉	施釉	精製土	—	暗オリーブ褐色	暗オリーブ褐色	貫入あり、唐津系陶器
第 14 図 16	一括	陶器	碗	(11.0)	—	—	(4.1)	施釉	施釉	精製土	—	赤黒色	赤黒色	二次被熱、福岡産陶器、 鉄釉
第 14 図 17	本丸表採	陶器	碗	—	—	—	(2.2)	施釉	施釉	精製土	—	灰色	灰色	貫入あり、古唐津（絵唐津）
第 14 図 18	虎口北側 C 表土	陶器	碗	—	—	(4.9)	(2.8)	施釉	施釉	精製土	—	暗褐色～淡黄色	暗褐色～淡黄色	貫入あり
第 14 図 19	一括	陶器	碗	—	—	(4.2)	(3.2)	施釉	施釉	精製土	—	灰白色～黄褐色	灰白色	貫入あり、釉だれあり、 唐津系陶器
第 14 図 20	虎口南側礫層	陶器	碗	—	—	—	(1.3)	施釉	施釉	精製土 E F	—	黒褐色	黒褐色、にぶい黄褐色	
第 14 図 21	本丸 A-4	陶器	壺	—	—	—	(6.3)	施釉	施釉	精製土	—	暗灰黄色	暗灰黄色	
第 14 図 22	大手南檐南側表土	陶器	搦鉢	(27.6)	—	—	(3.8)	回転ナデ	回転ナデ、搦目	C E	良	灰赤色	赤褐色	
第 14 図 23	本丸 C-5 整地層 P3	陶器	搦鉢	—	—	—	(5.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	C E	やや不良	褐色	橙色～にぶい褐色	
第 14 図 24	石垣③西側トレ北	土師質	碗	—	—	—	(2.0)	回転ナデ、面取り	回転ナデ	A B	良	黒褐色	黒褐色	
第 14 図 25	石垣③西側トレ北	土師質	皿	(9.4)	—	(4.4)	2.0	回転ナデ	回転ナデ、面取り、糸切り	B C G	良	黒褐色	黒褐色	
第 14 図 26	石垣③西側トレ北	土師質	碗	—	—	—	(1.3)	回転ヨコナデ、糸切り	回転ヨコナデ	B D	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第 14 図 27	搦手口表土	土師器	高坏	—	—	—	(5.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	C E	良	橙色	橙色	
第 14 図 28	搦手口黒色層	須恵器	高坏	—	—	—	(7.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	E	良	緑黒色	緑黒色	透かしあり（4カ所か）
第 14 図 29	南側地山直上	須恵器	高坏	—	—	—	(2.1)	回転ナデ	ナデ	E	良	緑黒色	緑黒色～明オリーブ灰色	

法量の単位はcm、重量の単位はg。○書きは、残存と復原を表す。

胎土：A 角閃石 B 石英 C 長石 D 赤色粒子 E 白色粒子 F 黒色粒子 G 雲母 H 砂粒

出土遺物観察表 2

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
				長さ	幅	高さ	重量	外面	内面			外面	内面	
第 14 図 30	本丸 B-1	実弾		(2.4)	1.4	1.6	9.6							
第 14 図 31	本丸 B-2	実弾		(3.1)	1.4	1.4	10.2							
第 14 図 32	大手南櫓南側	実弾		5.1	1.2	1.3	10.0							
第 14 図 33	表探	実弾		6.0	2.3	1.3	25.2							
—	本丸 B-2	銭貨												写真のみ
—	虎口南側灰褐色土	銭貨												写真のみ

法量の単位はcm、重量の単位はg。○ 書きは、残存と復原を表す。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒

出土遺物観察表 3

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量			調整		胎土	焼成	色調		備考
				長さ	幅	厚さ	外面	内面			外面	内面	
第 15 図 1	表探	瓦	瓦当	(1.1)	7.5	1.7	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ	A G	良	オリーブ灰色	オリーブ灰色	
第 15 図 2	大手南櫓西側 A 表探	瓦	瓦当	(8.0)	(7.3)	2.1	ヨコナデ、一定方向のナデ	ヨコナデ、巴文	A C	良	灰色	灰色	
第 15 図 3	表探	瓦	瓦当付丸瓦	(16.0)	15.2	2.3	タテ方向のナデ、ヨコナデ、巴文	布目痕、ナデ	A B E F	良	暗灰色	暗灰色	
第 15 図 4	表探	瓦	瓦当	(8.0)	(15.0)	1.9	ヨコナデ、巴文	ヨコナデ、無調整	A B E	良	暗灰色	暗灰色	
第 15 図 5	表探	瓦	瓦当付丸瓦	(12.2)	11.7	1.8	タテ方向のナデ、ヨコナデ、ナデ	工具痕、ヨコナデ、ナデ	A C E	良	暗灰色	暗灰色	
第 15 図 6	表探	瓦	瓦当付丸瓦	(8.8)	14.4	2.2	タテ方向のナデ、ヨコナデ、巴文	布目痕後工具ナデ、ナデ	A B E F	良	暗灰色	暗灰色	
第 15 図 7	表探	瓦	瓦当	(14.1)	(11.0)	2.2	ヨコナデ、ナデ、タテ方向のナデ(離れ砂)、巴文	ヨコナデ、無調整	A B E G	良	暗灰色	暗灰色	
第 15 図 8	大手門 P37	瓦	丸瓦	25.4	(11.3)	2.6	タテ方向のナデ、ヨコナデ	布目痕、面取り	A B	良	灰色	灰色	
第 16 図 9	表探	瓦	丸瓦	28.7	13.3	2.4	ヨコナデ、ナデ	布目痕、面取り	A E	良	灰色	灰色	
第 16 図 10	P26	瓦	丸瓦	(13.3)	(11.2)	2.1	不定方向のナデ	布目痕、工具痕	A B	良	オリーブ灰色	オリーブ灰色	
第 16 図 11	表探	瓦	丸瓦	(9.3)	(8.5)	1.8	ヨコナデ	工具痕	A F	良	灰色 ~ オリーブ灰色	灰色 ~ オリーブ灰色	
第 16 図 12	P14	瓦	丸瓦	(19.4)	(11.5)	1.9	ヨコナデ、不定方向のナデ	ナデ、面取り、布目痕	A B	良	灰色	灰色	
第 16 図 13	日隈城跡表探	瓦	丸瓦	(16.0)	(6.1)	1.7	ヨコナデ、ナデ	布目痕、面取り	A F	良	オリーブ灰色	オリーブ灰色	
第 16 図 14	P14	瓦	丸瓦	(3.8)	(3.9)	1.4	ナデ	布目痕	E F	良	灰白色 ~ 灰色	灰白色 ~ 灰色	
第 17 図 19	大手門	瓦	軒先瓦	(7.6)	11.8	1.7	ナデ、面取り	ヨコナデ、不定方向のナデ	A G	良	暗灰色	暗灰色	
第 17 図 20	表探	瓦	軒先瓦	(8.5)	(17.5)	1.9	コビキ痕、ヨコナデ	ナデ	E G	良	暗灰色	暗灰色	
第 17 図 17	虎口北側石垣 C P13	瓦	平瓦	(9.8)	(11.2)	1.9	ナデ、面取り	ナデ	A B C F	良	暗灰色 ~ オリーブ黒色	暗灰色 ~ オリーブ黒色	
第 17 図 16	曲輪 10	瓦	平瓦	(11.0)	(10.4)	2.0	ミガキ、ケズリ	ナデ、ミガキ	A B E F G	良	暗灰色 ~ 灰色	暗灰色 ~ 灰色	
第 17 図 18	虎口北側石垣 C P12	瓦	平瓦	(19.0)	(16.0)	2.0	不定方向のナデ、ナデ	タテ方向のナデ	A B E F	良	オリーブ黒色	オリーブ黒色	
第 17 図 15	虎口北側 C 地山直上	瓦	平瓦	(21.4)	(11.1)	1.8	ヨコナデ、タテ方向のナデ、面取り	不定方向のナデ	A B	良	暗オリーブ灰色	暗オリーブ灰色	
第 17 図 21	曲輪 10	瓦	鬼瓦	(8.7)	(18.2)	2.1	不定方向のナデ	タテ方向のナデ、ヨコナデ	A G	良	灰オリーブ色 ~ 暗灰色	灰オリーブ色 ~ 暗灰色	

法量の単位はcm、重量の単位はg。○ 書きは、残存と復原を表す。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒



1. 本丸跡(発掘2次1トレンチ)礎石検出状況(南から)



2. 本丸跡(発掘2次1トレンチ)礎石検出状況(南から)



3. 天守跡石垣(番号1)検出状況



4. 天守跡(発掘3次1トレンチ)発掘状況(南西から)



5. 天守跡(発掘3次1トレンチ)建物跡発掘状況(南西から)



1. 大手門石垣 (番号 8・9)



2. 大手門石垣① (番号 6)



3. 大手門石垣② (番号 6)



4. 大手門 (2次4トレンチ) 発掘状況 (西から)



5. 大手門 (2次3トレンチ) 発掘状況① (南から)



6. 大手門 (2次3トレンチ) 発掘状況② (南から)



7. 搦手門 (発掘2次2トレンチ) 発掘状況 (北から)



1. 搦手門 本丸北石垣東 (番号 3) 東側検出状況 (北から)



2. 搦手門 (発掘 2 次 2 トレンチ) 発掘状況 (北から)



3. 天守跡西石垣 (番号 2) 検出状況 (北から)



4. 本丸跡北石垣 (番号 3) 検出状況 (北から)

写真図版 4



1. 本丸跡北石垣 (番号 3) 検出状況① (北から)



2. 本丸跡北石垣 (番号 3) 検出状況② (北から)



3. 堀・曲輪⑧北石垣 (発掘 3 次 3 トレンチ) 発掘状況① (北から)



4. 堀・曲輪⑧北石垣 (発掘 3 次 3 トレンチ) 発掘状況② (東から)



5. 堀・曲輪⑧北石垣 (発掘 3 次 3 トレンチ)
北壁積み石検出状況 (東から)



6. 大手門 (発掘 2 次 3 トレンチ) 発掘状況 (真上から)



14-22



14-23



14-28



14-27



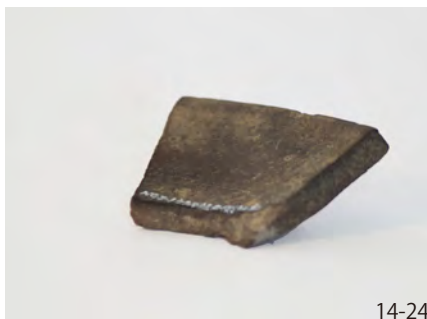
14-29



14-25



14-26



14-24



14-33



14-32



14-30



14-31



17-21



15-1



15-7



15-2

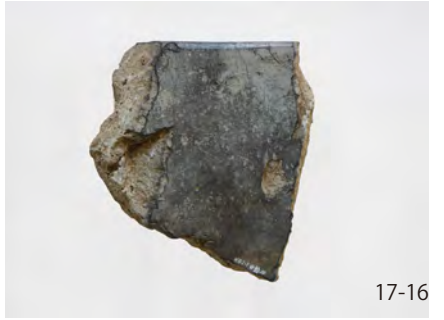
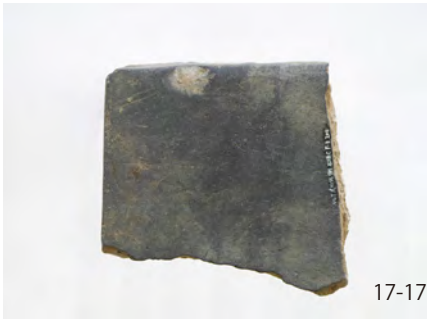


15-4



15-6

写真図版6



報 告 書 抄 録

ふりがな	ながやまじょうあと3
書名	永山城跡Ⅲ
副書名	
巻次	(3)
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書/市内遺跡発掘調査報告書
シリーズ番号	第121集/16
編著者名	若杉竜太・行時桂子・上野淳也・上原翔平
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1 0973(24)7171
発行年月日	2015年(平成27年)3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながやまじょうあと 永山城跡	おおいたけんひたし 大分県日田市 まるやま ちょうめ 丸山2丁目	44204-6	204110	33° 19' 56"	130° 56' 9"	20110810 ～1209 (2次調査) 20120726 ～1028 (3次調査)	727㎡ (2次調査) 528㎡ (3次調査) 199㎡	保存目的 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
永山城跡	城跡	近世	礎石建物跡 門跡 石垣 堀跡 ピット	陶磁器、瓦	

要約	<p>永山城跡は、日田盆地北側を流れる花月川右岸の独立丘陵上に築かれた城郭である。本丸跡で礎石建物跡が発見され、大手門や搦手門の構造の一部が判明し、永山城の城郭の平面構造を考える上での基礎資料を得ることができた。</p> <p>石垣は数回にわたる補修痕跡や築城時の石垣が残っていることが確認できた。さらに、破城の痕跡も確認でき、廃城後の状況を知る手がかりを得ることができた。</p> <p>また、堀は箱堀で、その深さが堀の北側では約3mであることが判明した。</p> <p>遺物については、永山城築城前後から廃城された頃までの陶磁器を中心として出土している。この他、古墳時代の遺物や近・現代の遺物も出土しており、各時代にわたって利用されてきたことが判明した。</p>
----	---

永山城跡Ⅲ

2015年3月31日

編集 日田市教育庁文化財保護課
〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1

発行 日田市教育委員会
〒877-0023 大分県日田市田島2-6-1

印刷 山本印刷工業株式会社
〒877-0059 大分県日田市大日町3986-3



日田市